1.野条遺跡第17·19次発掘調查報告

はじめに

野条遺跡は、京都府南丹市八木町野条に所在する弥生時代から中世にかけての複合集落遺跡である。当遺跡は、府営ほ場整備事業および府道亀岡園部線改良工事の実施に先立ち、平成6年度から八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)が実施した町内遺跡詳細分布調査報告によって新たに周知された遺跡である。平成10年度以降の19次にわたる調査を経て、遺跡の概要が明らかになり、これまでに弥生時代後期の竪穴式住居跡や、平安時代後期の掘立柱建物跡群、さらに奈良~平安時代にかけての主に灌漑用とみられる溝群等、各時代の多くの遺構が確認されている。

今回の調査は、府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。野条遺跡第17次調査(平成22年度)、第19次調査(平成23年度)の調査体制は、以下に示すとおりである。本報告は、第17次調査・第19次調査の成果をあわせたものである。執筆の分担は、[2]を古川・大髙、[3]を高野と古川が執筆し、ほかを高野が担当した。調査に際しては、京都府土木建築部や南丹市教育委員会、京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して深く感謝したい。なお、今回の調査に係る経費は、全額、南丹広域振興局が負担した。

〔調査体制等〕

野条遺跡第17次(平成22年度)

現地調查責任者 調查第2課長 肥後弘幸

調 查 担 当 者 調查第2課主幹第3係長事務取扱 石井清司

同 調査員 高野陽子・村田和弘

調 查 場 所 南丹市八木町野条

現地調査期間 平成22年7月5日~12月3日

調 査 面 積 1,950㎡

野条遺跡第19次(平成23年度)

現地調查責任者 調查第2課長 水谷壽克

調 查 担 当 者 調査第2課第2係長 岩松 保

同 調査員 古川 匠・大髙義寛

調 查 場 所 南丹市八木町野条

調 査 期 間 平成23年8月17日~12月22日

調 査 面 積 1,130㎡

周辺の遺跡と過去の調査

野条遺跡の周辺は、亀岡盆地北部の中でも各時代にわたる多くの遺跡が分布する地域である。 旧石器時代~縄文時代には、池上遺跡の国府型ナイフ形石器の出土や、縄文時代後期の土壙を検 出した大谷口遺跡、室橋遺跡にみるメノウ製の打製石鏃が知られる。本格的な集落が確認できる のは弥生時代中期であり、野条遺跡の南東約1kmには、亀岡盆地北部の拠点的集落である池上 遺跡が形成される。池上遺跡では、碧玉製玉作り関連遺物が出土した竪穴式住居跡や多数の方形 周溝墓群が確認されている。丹波帯に属するこの地域は、良好な石器素材となる粘板岩を産出し、



- 1. 野条遺跡
- 2. 室橋遺跡
- 3. 新庄城跡
- 4. 新庄遺跡
- 5. 船枝遺跡 6. 清谷古墳群

- 7. 大谷口遺跡 8. 諸畑遺跡 9. 八木田遺跡 10. 日置遺跡 11. 幡日佐遺跡 12. 如城寺

- 13. 野条城跡 14. 池上院 15. 筏森山古墳群
- 16. 城谷口古墳群

- 17. 池上遺跡 18. 池上古里遺跡
- 19. 刑部城跡
- 20. 多国山古墳群

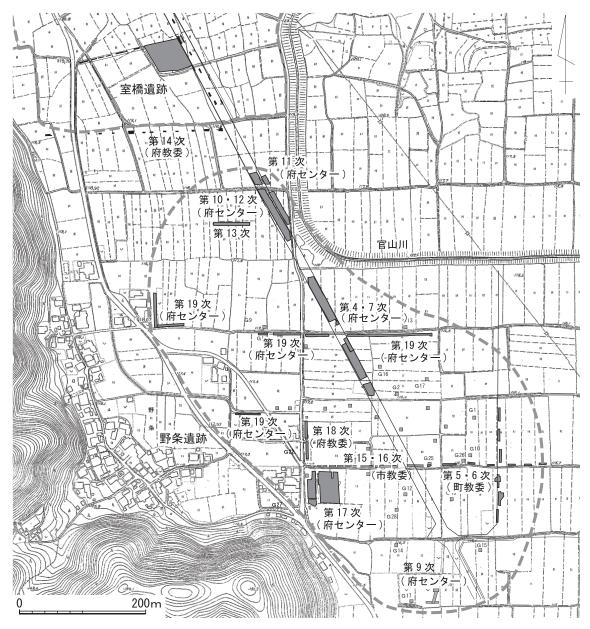
第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25000殿田・亀岡)

石材産地であることがこうした中期集落の大規模化の背景にあったと考えられる。弥生時代後期の集落は、北部の諸木山裾部に後期前葉~後葉の諸畑遺跡や大谷口遺跡を中心に小規模な集落が点在するが、後期後葉には平野部に広がり、野条遺跡南部を中心に展開するとみられる。野条遺跡の過去の調査では、旧八木町教育委員会による第5次調査で、野条遺跡南東部において弥生時代後期中葉の竪穴式住居跡2基を検出し、当センターによる第7次調査では後期後葉の焼失住居等が確認されている。また室橋遺跡では、弥生時代の灌漑用の水路と推定される大規模な溝が検出され、後世にもみられる水利灌漑の工夫が早くからなされたことが知られる資料となっている。

古墳時代には、中期前半において、導入期の竈をもつ諸畑遺跡や大谷口遺跡などを核とする集落が出現し、室橋遺跡では大規模な溝や、竪穴式住居跡群の広がりがみられるようになる。特に諸畑遺跡では、近畿地方でも最古式の造り付け竈をもつ竪穴式住居跡群が検出され、これらのなかには初期須恵器を出土する住居跡が含まれることから、渡来系の技術系譜のもとに一帯の開発が開始されたと推定される。古墳時代中期の竪穴式住居跡は、室橋遺跡や野条遺跡でも検出され、野条遺跡第14次調査では、中期前半の竪穴式住居跡を検出し、中期の居住域が南部の平野部にも部分的に広がることが確認された。

奈良時代には、室橋遺跡の北部~西部では奈良時代後期の大形掘立柱建物跡群や大小の溝群が 付表1 野条遺跡の調査次数一覧

調査名	調査主体	調査年度	面積	主要遺構	備考
野条遺跡第1次	八木町教育委員会	平成7年度	12m²	_	試掘
野条遺跡第2次	八木町教育委員会	平成 10 年度	112m²	柱穴・土坑・溝(古代~中世)	試掘
野条遺跡第3次	八木町教育委員会	平成 11 年度	68m²	溝(奈良)	試掘
野条遺跡第4次	当センター	平成 14 年度	450m²	掘立柱建物跡 (鎌倉~室町)	
野条遺跡第5次	八木町教育委員会	平成 14 年度	308m²	竪穴式住居跡 (弥生後期)	
野条遺跡第6次	八木町教育委員会	平成 14 年度	185 m²	柱穴・溝	
野条遺跡第7次	当センター	平成 15 年度	1,200 m²	焼失竪穴式住居跡 1 基(弥生後期)	
野条遺跡第8次	八木町教育委員会	平成 15 年度	80 m²	溝・土坑	
野条遺跡第9次	当センター	平成 15 年度	130 m²	溝(平安後期)	
野条遺跡第10次	当センター	平成 17 年度	700 m²	掘立柱建物跡・井戸・溝(平安)	
野条遺跡第11次	当センター	平成 18 年度	600 m²	柱穴・溝(奈良・平安)	
野条遺跡第12次	当センター	平成 18 年度	570m²	掘立柱建物跡・溝(奈良・平安)	
野条遺跡第13次	当センター	平成 19 年度	200 m²	港 (冉	
野条遺跡第14次	京都府教育委員会	平成 21 年度	340 m²	竪穴式住居跡 (古墳中期)・土坑・溝 (中世)	
野条遺跡第 15 次	南丹市教育委員会	平成 21 年度	170m²	落ち込み状遺構 (弥生後期)・溝 (奈良)・ 柱穴	
野条遺跡第16次	南丹市教育委員会	平成 22 年度	135 m²	溝(奈良)・柱穴	
野条遺跡第17次	当センター	平成 22 年度	1950m²	溝 (弥生後期後葉~古墳初)・掘立柱建物跡 (奈良~鎌倉)	
野条遺跡第18次	京都府教育委員会	平成 22 年度	300 m²	溝(弥生後期末~古墳初)	
野条遺跡第19次	当センター	平成 23 年度	1,130 m²	溝 (弥生後期末~古墳初)、溝 (平安~鎌倉)、 柱穴	



第2図 各年度の調査地位置図

確認され、墨書土器が出土している。この地では、平安時代中期には、野条遺跡の南方に、天台宗の僧皇慶が、のちに池上寺となる「池上房」(現池上院)を造営したとされ、一帯は、亀岡市池尻・南丹市屋賀に所在したとされる丹波国府の北部域に形成された国衙領であったと推定される。平安時代末期には、室橋遺跡北部で堀によって区画された屋敷地とみられる遺構が検出され、現在の新庄用水の下層の調査では、灌漑用とみられる溝が確認されている。周辺では発掘調査で奈良~平安時代の多数の溝群が検出され、神護寺の僧文覚が改修したとする伝承が残る新庄用水の開削時期を考える上で重要な遺構群となった。野条遺跡では、当センターによる第4・10・12次調査で、奈良~平安時代の溝、平安時代の掘立柱建物跡群、井戸などを検出している。特に平安時代末期(12世紀後半)の建物群は正方位にのり、溝も東西方向に掘削されていることから、条里型地割に基づいた地割の改変を伴う大規模な土地開発が行われたと推定される。

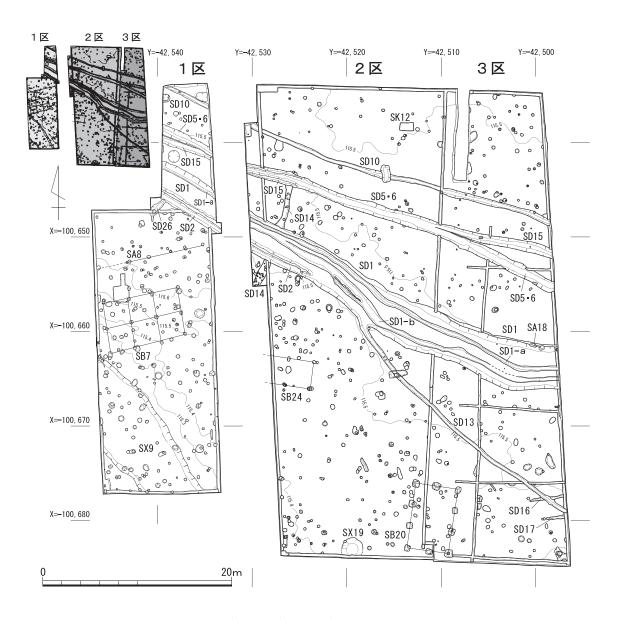
[1]野条遺跡第17次(平成22年度)

1. 調査経過

第17次調査の調査地は、野条遺跡の南西部において3か所の調査区を設定した。調査地点は、 ほ場整備予定地内における平成21年度の試掘調査を受け、ほ場整備工事による耕作面の掘削レベ ルを検討したうえで、京都府教育委員会・南丹市教育委員会との協議のもとに調査範囲を決定し たものである。調査は、まず機械掘削により現代の耕作土およびその下層の床土を除去した。床 土下層の堆積状況は、旧地形に起伏があり一様でなく、部分的に古墳時代~近世の遺物包含層が



-5-

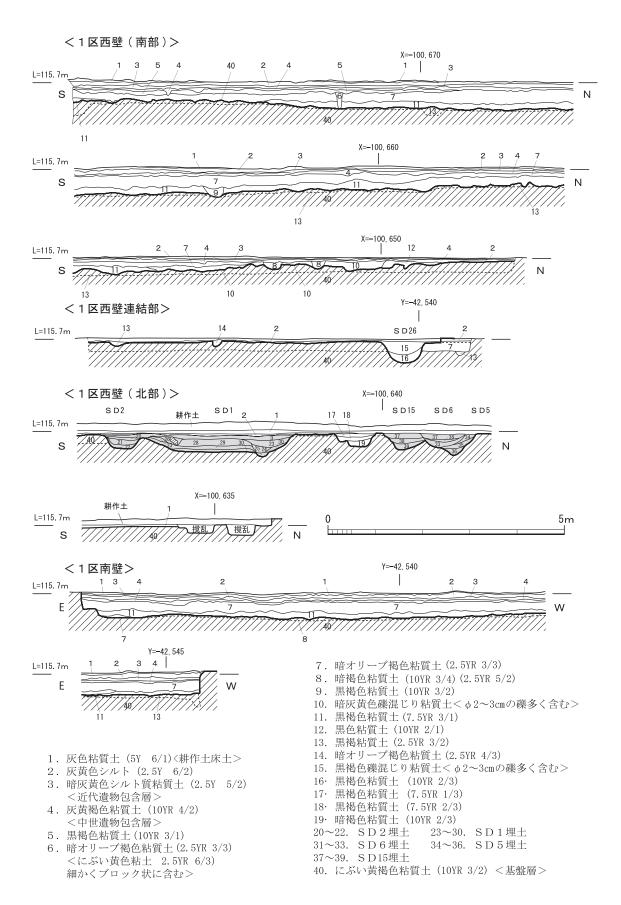


第4図 第17次調査区配置図

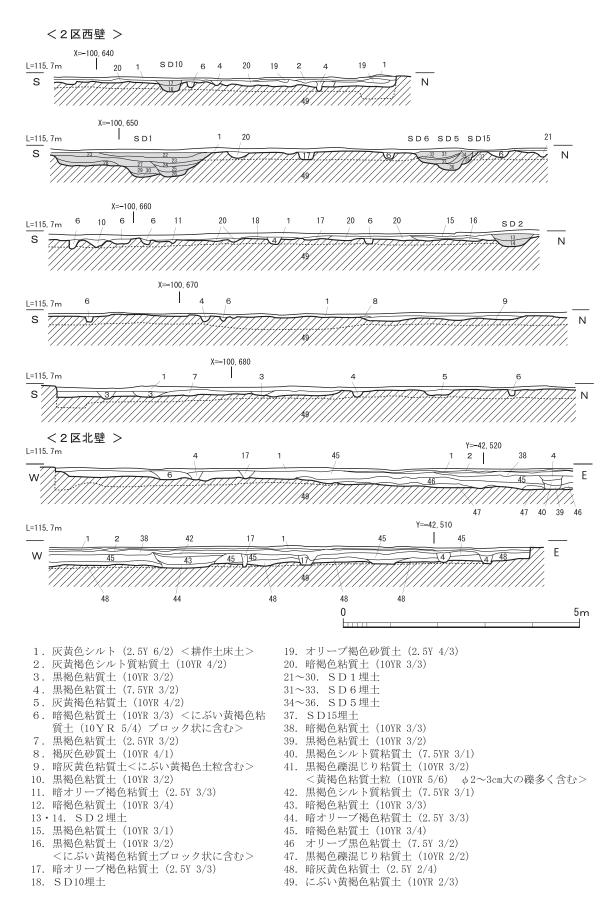
残る地点や、床土直下で遺構面が検出される地点があった。部分的に残る近世遺物包含層を機械掘削により除去したのち、人力により調査を進めた。調査面積は、当初1,800㎡の予定で調査を開始したが、遺構の広がりを部分的に確認する必要が生じたことから一部を拡張し、全体で1,950㎡の調査を実施した。調査区は、西から順に $1 \sim 3$ 区としたが(第4図)、2区と3区の調査区の間を拡張したため、最終的には $2 \cdot 3$ 区として連結する形となった。各調査面積は、1区は449㎡、 $2 \cdot 3$ 区は1,501㎡を測る。

2. 基本層序

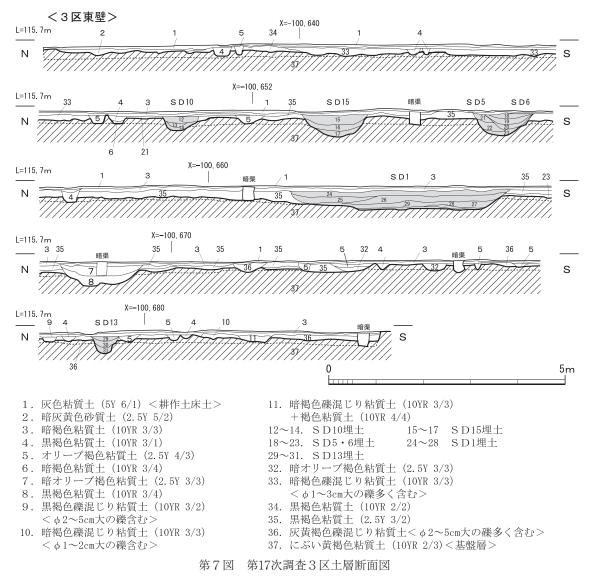
調査地周辺は、耕作地として平坦な地形が広がるが、調査地の南西に現在の新庄用水が流れており、北東から南西にかけて徐々に傾斜する地形となっている。現地表面となる耕作地の標高はおおよそ115.9mである。



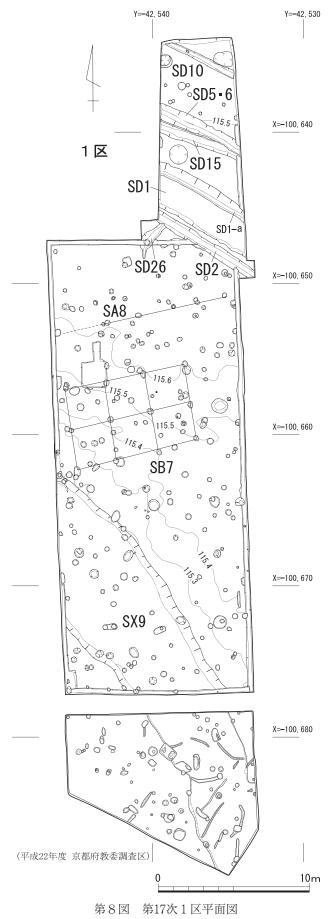
第5図 第17次調査1区土層断面図



第6図 第17次調査2区土層断面図



1区では、南部で旧地形が低くなり、古墳時代~近世にいたる各時期の遺物包含層を確認した。この地点は、調査対象地のなかでも包含層が最も厚い地点で、層序は上層から順に、近世遺物を包含する暗灰黄色シルト質粘質土層(第5図第3層)、中世遺物包含層である灰黄褐色粘質土層(同第4層)、古墳時代~平安時代の堆積層とみられる黒褐色粘質土層(同第5層)を確認した。第5層の検出面において、素掘り溝群を中心とした上層遺構を検出している。さらに、その下層にはいわゆる黒ボクの漸移層とみられる暗オリーブ褐色粘質土が堆積し(同第6層)、この層位の検出面で弥生時代の遺構面を検出した。基盤層(同第40層)の検出レベルは標高115.2mである。北部では、床土の直下で基盤層としたにぶい黄褐色粘質土を検出し、弥生時代~古墳時代の遺構群を確認した。標高は約115.6mを測る。また2・3区では、中央から南部にかけて、床土直下の標高約115.5m前後で基盤層(第6図第49層・第7図第37層)を確認し、弥生~古墳時代、奈良時代の遺構を検出した。2・3区北部では、西側で耕作土・床土直下で遺構が検出され、北部中央は弥生時代の堆積層と推定される暗褐色粘質土層(第6図第45層)を確認し、いわゆる黒ボク層のオリーブ黒色粘質土層(同第46層)を挟んだ下層の標高約115.3~115.4mで基盤層を検出した。

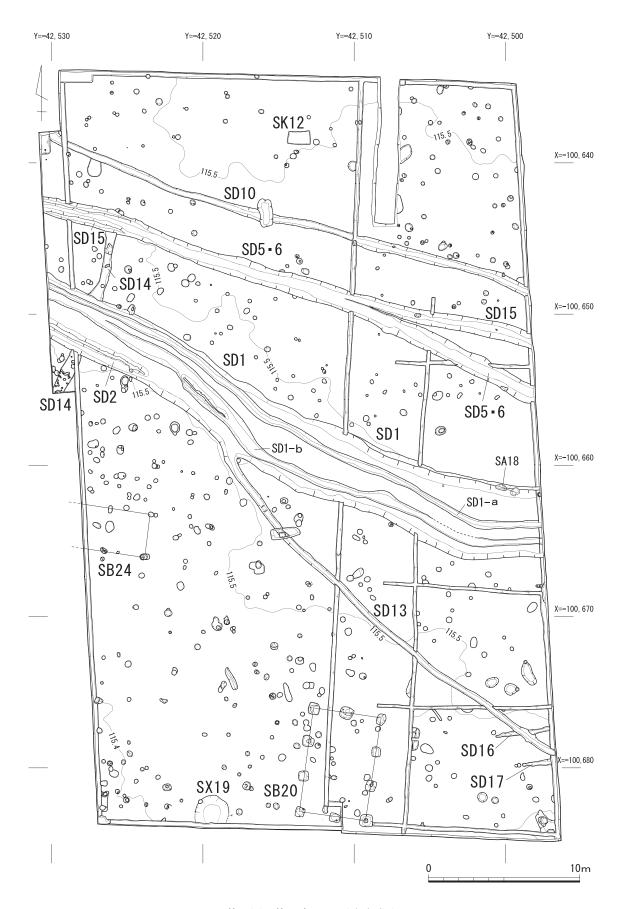


3. 検出遺構

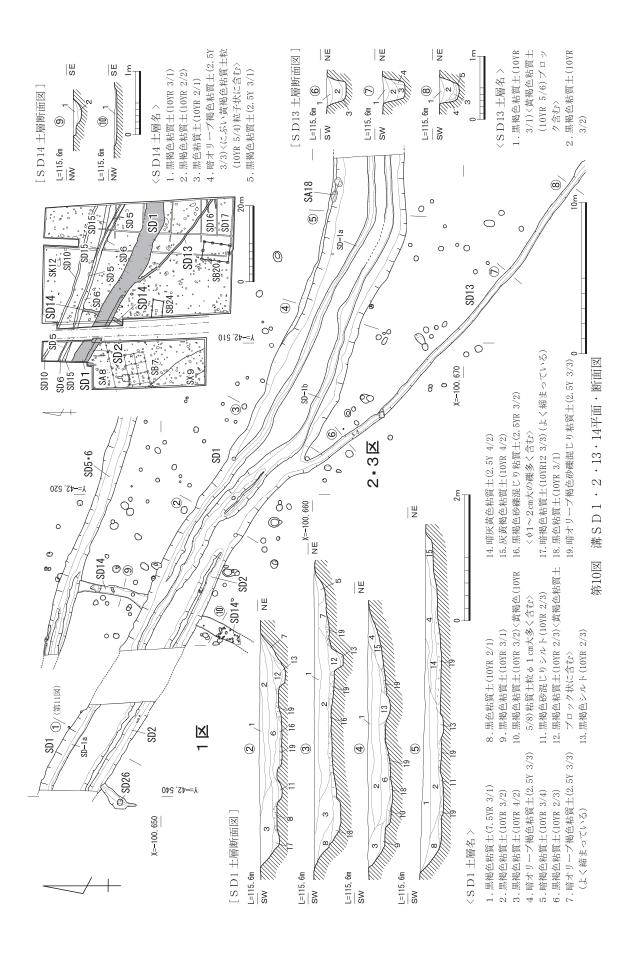
今回の調査では、弥生時代後期~古墳 時代にかけての溝群や土坑、奈良時代~ 平安時代にかけての掘立柱建物跡や柵 列、中世~近世の素掘り溝群等、各時代 の遺構を検出した(第8・9図)。弥生時 代後期末~古墳時代初頭の遺構として は、調査区の北西から南東にかけて、大 小7条以上の溝群を確認した。溝SD1 は、幅4~5mの規模をもち、再掘削を 伴う大規模な溝である。調査区南西では 溝SD1に平行して溝SD2が掘削さ れ、2・3区中央では溝SD1から南西 方向に分岐する溝SD13を検出した。ま た溝SD1の北側では、溝SD5・6・ 15を一部重複して検出し、さらにその北 で溝SD10を検出した。いずれも北西か ら南東へと掘られた溝であり、弥生時代 後期末~古墳時代初頭の溝とみられる。

奈良~平安時代の遺構は、掘立柱建物跡や柵列を検出した。2・3区南部で検出した掘立柱建物跡SB20は、方形の掘形の柱穴群で構成される奈良時代後期の建物跡である。2区西部ではこれと主軸を同じくする掘立柱建物跡SB24を検出した。また1区では平安時代~鎌倉時代と推定される掘立柱建物跡SB7と、北側に平行する柵列SA8を確認した。いずれも奈良~平安時代の建物跡や柵列と推定される。

また上層遺構として、1区で南北方向 やや東に斜行する素掘り溝群を検出し、 2区南東では東西方向の2条の素掘り溝 を検出した。いずれも土器を出土してい ないが、検出状況から時期はおおよそ中



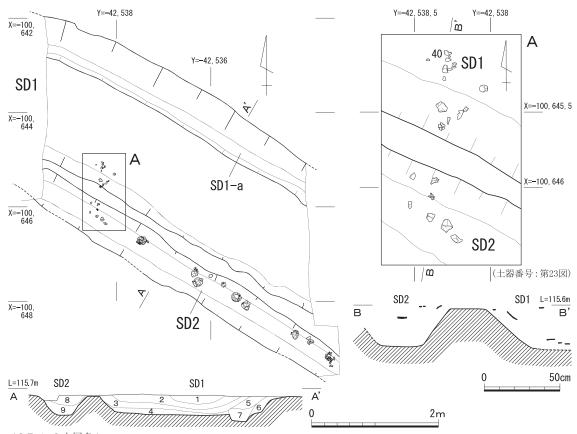
第9回 第17次2 · 3区平面図



期~近世にかけての遺構群と推定される。

以下、時期を追って、各遺構について詳述する。

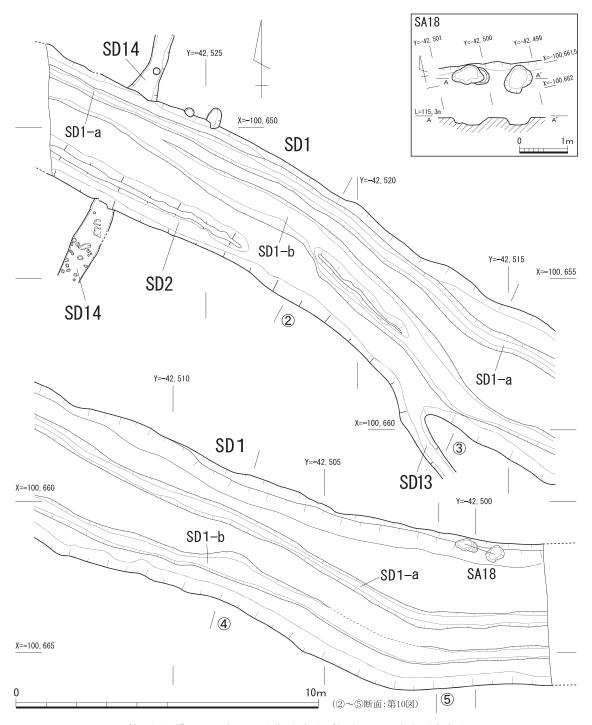
溝SD1(第10~12図) 調査区北西から南東へ向けて掘削された大規模な溝である。1区北 西隅から3区東端まで、約50mにわたって検出した。溝の断面形は、逆台形状をなす。溝の幅は 北西ほど狭く、南東へ向けて徐々に広がる。西部(1区)では幅約28~3.0mを、中央部(2区)で は約3.6~4.0mを、東部(3区)では約4.0~5.5mを測る。検出面での深さは約0.3~0.4mを測る。 溝の埋土は、上層は黒褐色粘質土(第11図第2層)、中層は暗褐色粘質土(同第3層)、下層は暗褐 色砂礫混じり粘質土(同第4層)からなる。最下層となる第4層の下面では、2~3cm大の礫を 集中して検出した。この層は中央部から東部で特によく残存しており、この層位を断ち切って、 SD1-a、SD1-bとした2条の小規模な溝が掘削されている。SD1-aは、西部ではSD1の北辺に掘削され、中央部で北辺から南辺へと流れを変え、さらに東部では徐々に浅くなり消滅 する。また、SD1-bは、中央部では北辺に沿って掘削され、東部では溝の中央部へと流れを 変えている。これらの溝は、SD1の流量が低下した際に、流量を確保するために再掘削された 溝と推定される。 SD1の東端では、北辺肩部で東西に並列して穿たれた2基の柱穴を検出した。 径0.3~0.4m、深さ0.4mを測る。架橋に伴う支柱痕の可能性がある。出土遺物は、溝底を中心



〈SD1·2 土層名〉

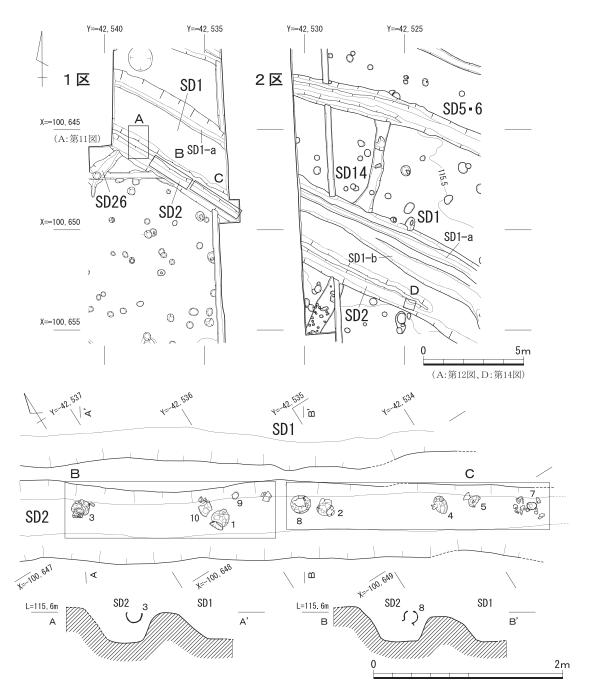
- 1. 暗灰黄褐色粘質土(2.5Y 4/2) <黄褐色ブロック細粒多く含む 10YR 5/6>
- 2. 黒褐色粘質土(10YR 3/2)(上層)
- 3. 暗褐色粘質土(10YR 3/3)(中層)
- 4. 暗褐色砂礫混り粘質土(10YR 3/4) (φ 2 ~ 3 cm以下の礫含む)
- 5. 黒褐色粘質土(2.5Y 3/2)
- 6. 黒褐色粘質土(10YR 3/1)
- 7. 黒褐色礫混り粘質土(10YR 2/2)
- 8. 暗褐色粘質土(10YR 3/4)
- 9. 黑褐色粘質土(10YR 2/2)

第11図 溝SD1・2(1区)平面・談面図・土器出土状況図



第12図 溝SD1(2·3区)平面図、柱列SA18平面・断面図

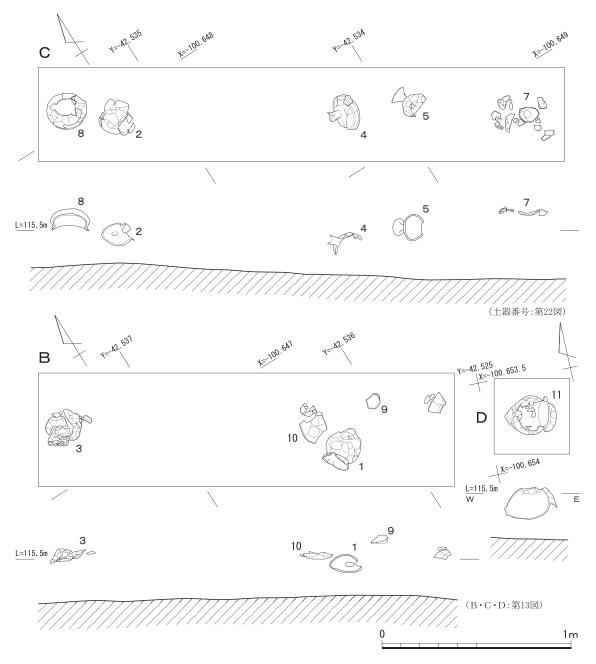
に土器が出土しているが、いずれも摩耗し細片化している。土器にはやや時期幅があり、弥生時代後期末~古墳時代初頭の土器を主体とするが、一部に後期後葉に遡るものがある。SD1は、耕作土・床土の直下で検出されたことから、上層は後世の削平を受けているとみられる。溝の下層には砂礫を多く含むことから、流路としての機能が主体であり、灌漑を目的に掘削された溝と推定される。過去の調査で確認された野条遺跡の竪穴式住居跡群は、SD1の北部から東部かけて展開することから、SD1は集落の南西の境界を画する溝と考えられる。出土土器から、SD1は弥生時代後期後葉に掘削が始まり、再掘削を繰り返し、古墳時代初頭(庄内併行期古相)まで



第13図 溝SD2(1区)平面·断面図·土器出土状況図

存続したと推定される。

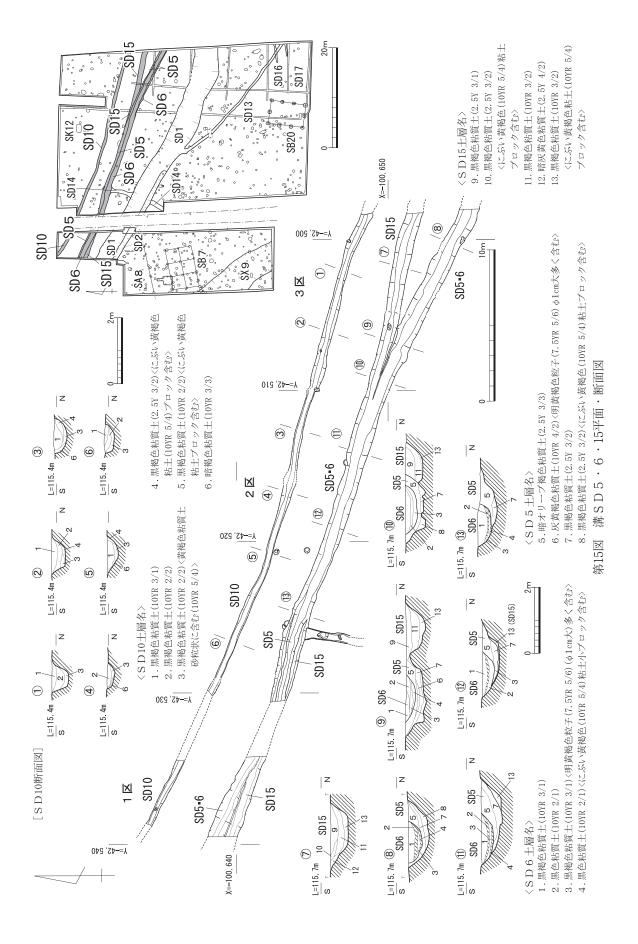
溝SD2(第11・13・14図) 調査区西部において、SD1の南辺に接して検出した溝で、2区 西部でSD1に合流する。1区北西隅から2区西部まで、約18mにわたって検出した。断面形は 台形をなし、溝の幅は約0.6m、深さ約0.4mを測る。SD2とSD1との間には、基盤層を土手 状の高まりとして検出した。出土遺物は、1区において土器がまとまって出土した(第13・14図)。器種は、壺・甕・高杯・台付鉢・鉢などを含み、約10点が出土した。これらの土器は、底部から 約5~10cm程度上層のレベルで、溝の北寄りで口縁部を下方にして出土した土器が多く、SD1およびその間の土手状の高まり側から投棄あるいは転落したとみられる。土器の多くがほぼ完

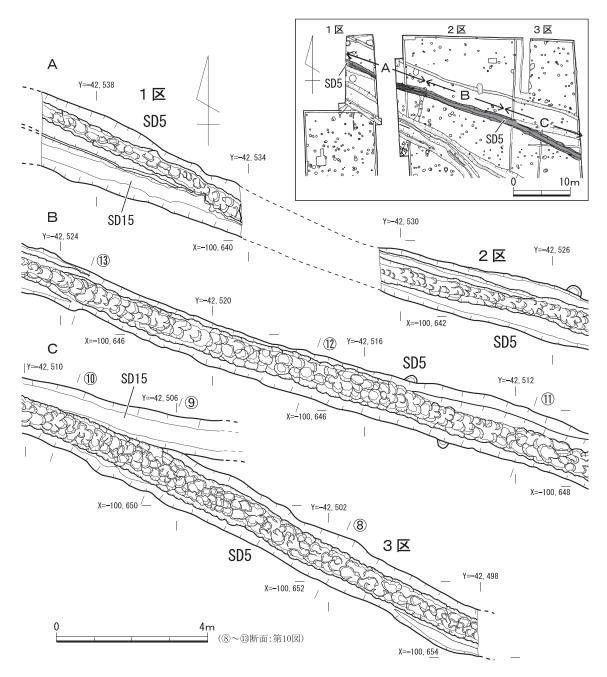


第14図 溝SD2(1区)土器出土状況図

形に復元でき、列状に出土したことから、一括して廃棄、または土手上に置かれ、転落したものであろう。SD1とともに集落の南西を画する溝とみられ、集落の境界域において、土器を伴う何らかの祭祀あるいは儀礼的な行為が行われたと推定される。また、土手状の高まりを中心にSD2とSD1の双方に土器片が広がり(第11図)、一部接合関係を確認したことから、2条の溝は併存することが明らかである。先述のように、SD1が集落の南西隅を画する溝とみられることから、SD1の外側に新たにSD2が掘削されたとみられる。出土土器から、時期は弥生時代後期末~古墳時代初頭(庄内併行期古相)と推定される。

溝 S D 26(第8図・第13図) S D 2の西端で検出した南西方向に掘削された溝である。幅約 $0.5 \sim 0.8$ m、深さ約0.4mを測る。遺物は出土していないが、埋土の状況からSD1・2と同時





第16図 溝SD5平面図

期の溝と推定される。SD2にむけて浅く終息し、完全に連結した状況にはない。

満SD5・6(第15・16図) SD1の北側に平行して検出した溝で、北西から南東にむけて掘削された溝群である。2条の溝は、ほぼ重複して検出した。断面の観察から、SD5の埋没後、SD6が再掘削されたことが判明した。SD5は、幅1.2~1.4m、検出面での深さ約0.3~0.4mを測り、SD6は、幅0.6~0.8m、深さ約0.2mを測る。SD5は、逆台形状の断面をなし、SD6は「U」字形の断面をなす。SD5・6の埋土には砂礫層は認められず、SD1のように常に水流がある状況ではなかったと推定される。溝の底部で、鋤鍬等の耕作具によるとみられる鱗状の連続する掘削痕を検出した(第16図)。溝底面の整形がなされていないことから、SD5もまた再掘削による溝の可能性がある。出土遺物はわずかながらあり、時期は古墳時代初頭(庄内併

行期新相)と推定される。

溝SD15(第15図) SD5・6と一部を重複して検出した溝である。SD5に先行して掘削された溝である。西部(1区)では、SD5よりも南で検出し、東部(3区)では、SD5よりも北で検出した。断面形は台形状をなし、規模は幅1.0m、深さ約0.3mを測る。出土土器から、時期は弥生時代後期末~古墳時代初頭(庄内併行期古相)と推定される。

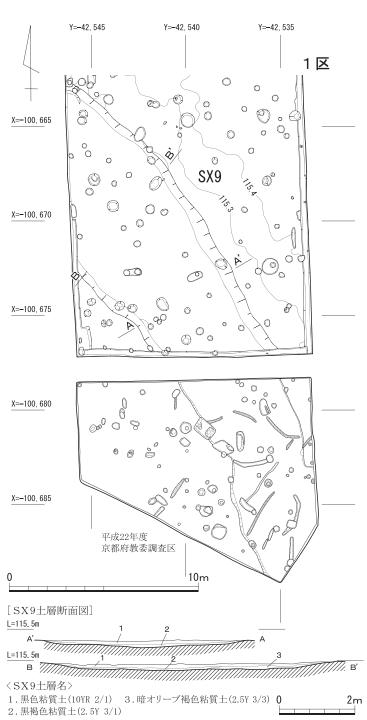
溝SD14(第13図) 2区西辺でSD15と接し、南へ分岐するように掘削された溝である。幅

 $0.5 \sim 0.9$ m、深さ0.1mを測る。南部でSD1と直交するが、土層観察から、SD1に先行して掘削された溝とみられる。時期を確定できる土器資料はみられないが、SD15と連結することからほぼ同時期の溝と推定される。

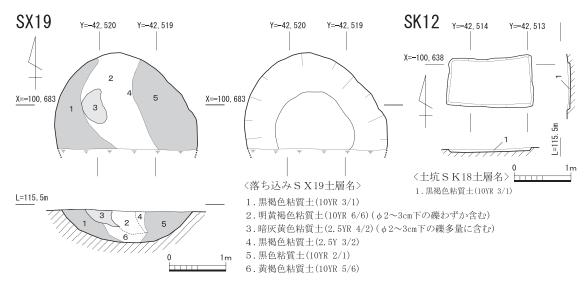
満SD10(第15図) 調査区の最も北で検出した溝である。幅0.4~0.7m、深さ0.2~0.3mを測り、断面形は台形状をなす。土器は出土していないが、埋土の状況から弥生時代後期末~古墳時代初頭の溝と推定される。

溝SD13(第10図) SD1の中央部から南へ派生する溝である。幅約0.4m、深さ約0.35mを測り、断面形は台形状をなす。出土遺物から、時期は弥生時代後期末~古墳時代初頭(庄内併行期古相)と推定される。

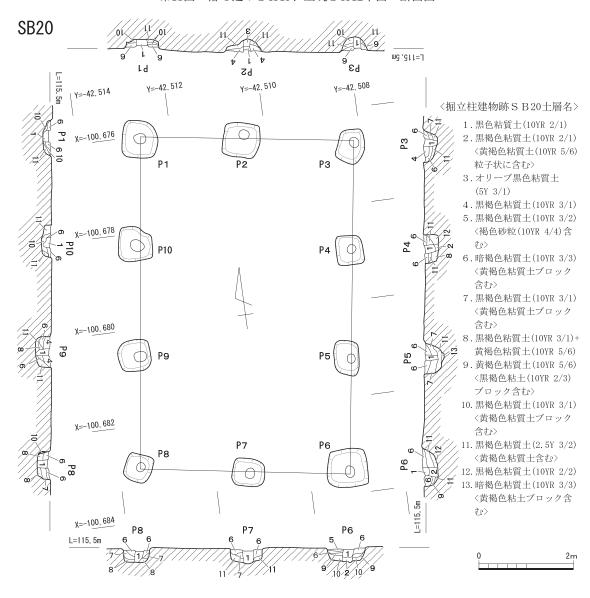
落ち込みSX19(第18図) 調査 区中央南端で検出した楕円形状の 落ち込みである。基盤土の黄褐色 粘質土の外側に外輪状に黒褐色粘 質土を検出しており、風倒木痕の 可能性が高い。これまで野条遺跡 周辺では、こうした落ち込みがし ばしば検出され、災害との関連が



第17図 1区南部平面図、落ち込みSX9断面図



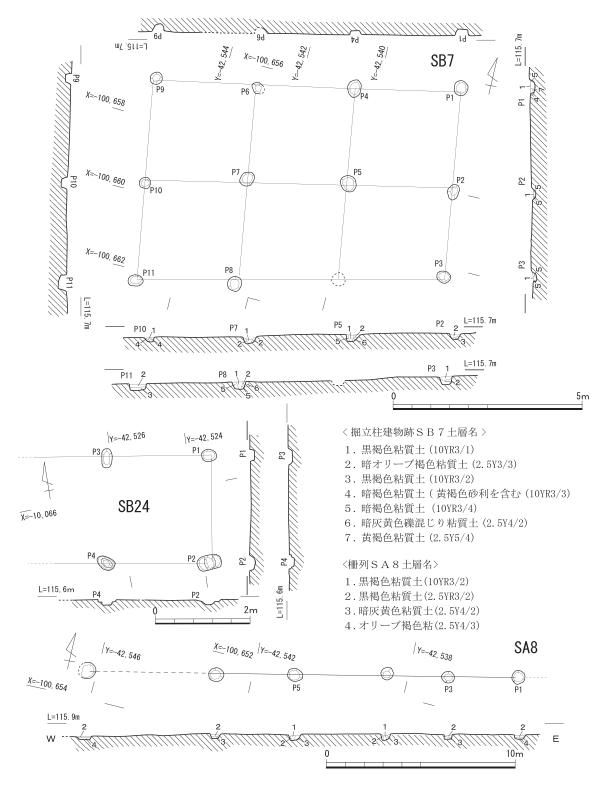
第18図 落ち込みS X 19、土坑S K 12平面・断面図



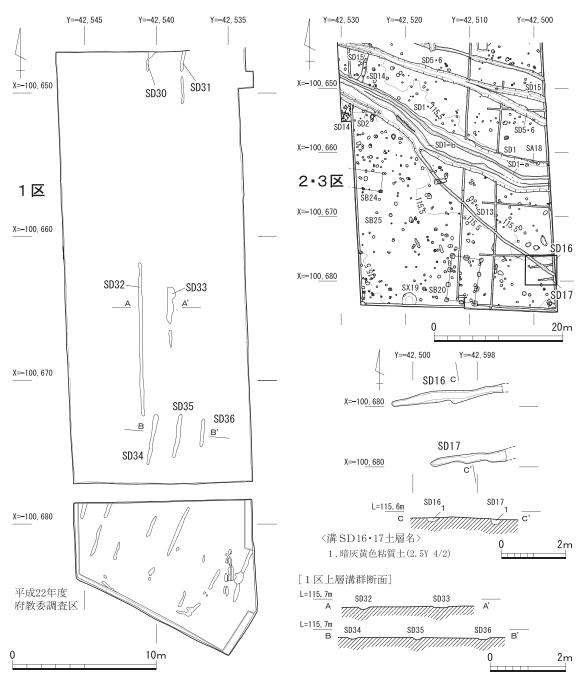
第19図 掘立柱建物跡SB20平面・断面図

指摘されるところであった。古環境の復原のため、加速器質量分析法(AMS)による土壌の放射性炭素年代測定を行った結果、 5770 ± 40 年BPの年代値が得られた。

土坑SK12(第18図) 調査区北部で検出した方形の土坑である。規模は、1.5×0.8m、深さ約5 cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第20回 掘立柱建物跡 SB7 · 24、柵列 SA8 平面 · 断面図



第21図 1区上層遺構平面図、溝SD16・17平面・断面図

掘立柱建物跡 S B 20(第19図) 調査地中央南部で検出した2間×3間の建物跡である。梁間 約4.4m、桁行約7.2mを測る。柱間は、約2.3~2.4mを測り、方形掘形の柱穴から構成される。主軸は、北から東へ7度振る。柱穴の規模は一辺0.6~0.8m、深さ約0.2~0.4mを測る。柱穴P 4 から須恵器杯Bの一部が出土したことから、奈良時代後半に帰属する建物跡と推定される。

掘立柱建物跡 S B24(第20図) 2区西部で一部を検出した 1 間× 2 間以上の建物跡である。 柱間は $2.7 \sim 2.8$ mを測る。主軸は、北から東へ 6 度振る。柱穴から遺物は出土していないが、S B20と主軸をほぼ同じくし、奈良時代の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡SB7(第20図) 1区で検出した建物跡である。東西3間(約8.0m)以上、南北2間(約5.0m)の規模をもつ。主軸は、北から西へ10度振る。柱間の距離は、2.4~2.5mを測る。

柱穴は、直径約0.3m、深さ約0.2mを測る。柱穴から土器は出土していないが、主軸が正方位にのり、この一帯では12世紀後半以降、地割や建物の主軸が正方位に変化することから、平安時代末以降の建物跡と推定される。

柵列SA8(第20図) 1 区北部で検出した東西方向の柵列である。 4 間以上の規模をもち、柱間は $1.8 \sim 2.3$ mを測る。 SB7と主軸を揃えることから、 SB7に伴う柵列の可能性がある。

溝 $SD30 \sim 33$ (第21図) 1区上層で検出した南北方向の溝で、北の $SD30 \cdot 31$ と南の $SD30 \cdot 31$

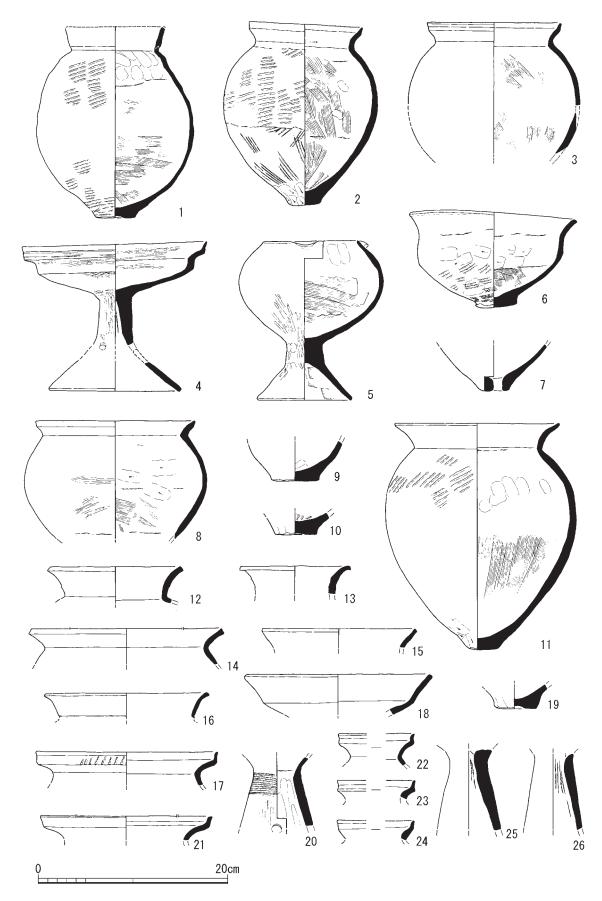
溝34~36(第21図) SD32・33の南部で検出した素掘り溝で、北東から北西にむけて掘削された溝群である。幅 $0.2 \sim 0.3$ m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、現在の地割と斜行するもので、中世から近世の耕作に伴う素掘り溝群とみられる。

満16・17(第21図) 3区南東端で検出した東西方向の溝である。幅約0.3m、深さ0.1mを測り、 溝間の距離は約2.2mを測る。埋土の色調等から、中世~近世の遺構と推定される。

4. 出土遺物

第17次調査で出土した土器は、整理箱20箱を数える。出土遺物は、弥生時代から近世の遺物を含むが、出土土器の約9割が溝SD1・2から出土したものであり、弥生後期後葉~古墳時代初頭の土器である。これらに加え、古墳時代中期、奈良時代、中世~近世にかけての若干の土器や、石製品を含む。以下、遺構ごとに出土遺物の詳細を述べたい。

満SD2(第22図 $1 \sim 11$) $1 \sim 10$ はSD2の1区から、11は2区から出土した。1区から出 土した1~8は、完形に復元できるものを多く含む一括性の高い土器群である。1は、短頸壺で ある。体部のプロポーションは、最大径を中位よりやや下部にもち、いわゆる底部輪台技法によ る窪み底をなす。体部外面はタタキ成形により、内面にハケを施す。色調は、にぶい橙色を呈す る。胎土にみる混和材は、石英・長石のほか、チャート・泥岩等の堆積岩類を基調とする在地の 組成である。2・3の「く」字口縁甕は、口縁端部に面をなし、摘みあげる特徴をもつ。2は、 体部中位下半に分割成形痕を残し、外面をタタキ成形、内面をハケ調整によって仕上げる。底部 は厚みのある平底で、底部周辺部に一部ケズリを施し、器壁の厚みを薄くする調整が施されてい る。口径10.8cm、器高19.1cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。3は、体部外面は剝離が著 しく、外面をハケ調整のちナデ、内面にハケを施す。口径14.0cmを測り、色調はにぶい橙色を呈 する。4は、北近畿系の長脚の有段高杯である。杯部がやや湾曲する。杯部口縁部外面に、退化 した擬凹線文が施され、内外面に横方向の細かなミガキを施す。脚部は、3方向に透かしを穿ち、 外面に丁寧な縦方向のミガキを施す。北近畿系土器の範疇で捉えられるが、杯部に明瞭な屈曲を もつ特徴は、丹後地域では一般にみられず、胎土もまた灰褐色砂粒や泥岩など堆積岩類を含むこ とから、丹波帯に属する北丹波地域からの搬入品かもしくは在地の模倣土器と推定される。口径 は17.6cmを測り、色調はにぶい黄橙褐色を呈する。5は、片口の台付鉢である。ワイングラス形

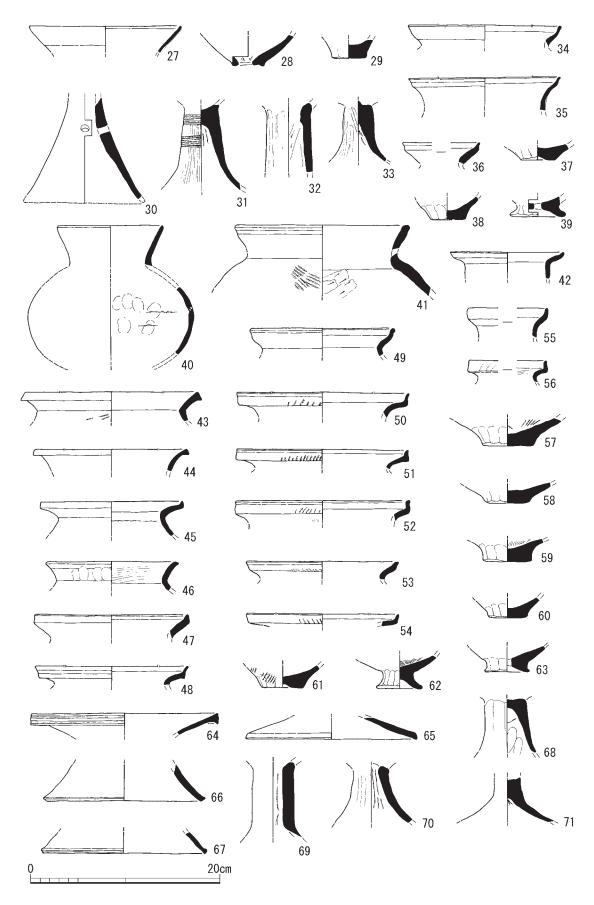


第22図 出土遺物実測図(1)

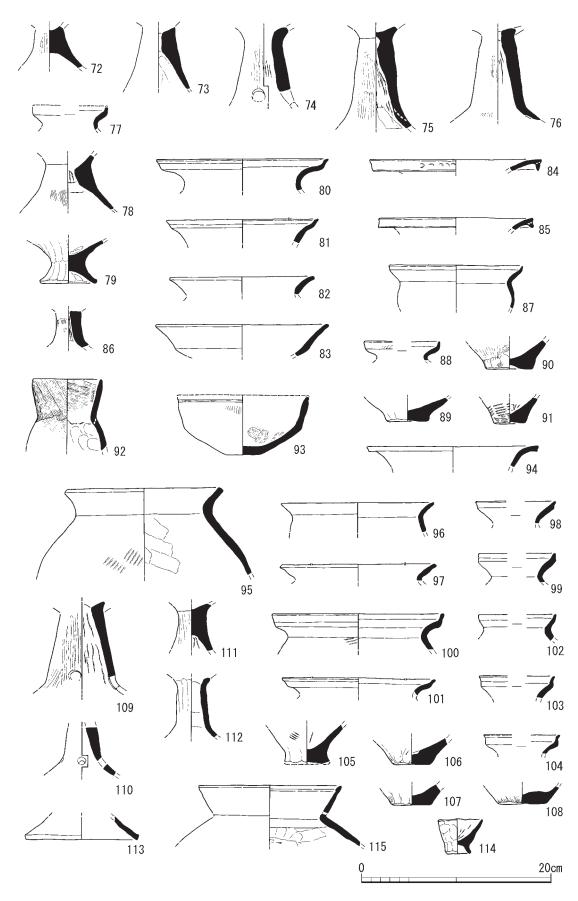
の大ぶりの鉢部を特徴とする。鉢部外面はナデ調整を、内面はハケ調整後に一部ナデが施される。脚部は、鉢部との接合部が中実となり、「ハ」字状に開く短脚の裾部をもつ。完形で出土したもので、口径9.9cm、器高15.9cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。胎土の混和材は、石英・長石など花崗岩起源の砂粒と、チャートなど堆積岩類を基調とする。6は、緩やかに外反する口縁部をなす鉢である。口縁部は湾曲し、器体全体のバランスを欠いている。外面には、タタキ成形を、内面にハケを施し、内面上半にはケズリのちナデ調整を施す。口径約17.0cm、器高約9.5~10.5cmを測る。7は、鉢形の甑の一部とみられ、底部に穿孔をもつ。8は、「く」字口縁をなす甕で、体部肩部が張る。外面は、器壁の剝離が著しいが一部にミガキが認められる。また内面はハケ調整ののち、上半部にはケズリが施される。口径は、16.6cmを測る。9は、小形の平底の鉢底部で、10は壺の底部とみられる。11は、「く」字口縁をなすタタキ成形による甕である。口縁部は立ち上がり角度が大きく、端部に向けて大きく外反する。底部は平底の底部をなすが、底部に向け外面の一部にケズリを施している。こうした底部周辺における外面調整は、2の甕にもみられ、底部の小形化傾向として時期的に新しい要素とみることができる。口径17.4cm、器高24cmを測り、色調は淡黄褐色を呈する。時期は、弥生系甕の面をなす口縁部や小形化した底部の形状から、古墳時代初頭(庄内併行期古相)とみることができる。

溝SD1 (第22~24図1~115) 12~26 (第22図)、27~71 (第23図)、72~113·115 (第24図) は、SD1から出土した。SD1は東西約40mにわたるため、以下、出土地点および層位ごとに詳述する。 $12 \sim 27$ は、SD1の1区から出土した。このうち $12 \sim 20$ は、1区埋土として取り上げたものである。 $12 \cdot 13$ は、広口壺の口縁部である。 $14 \sim 27$ の甕は、「く」字口縁をもつ甕(14~16)と、近江系の受口状口縁甕(17)がある。18は、高杯口縁部で、20は、脚部に櫛描文をもつ東海系高杯である。3方向に透かしをもつ。色調は灰白色をなし、搬入土器とみられる。 $21 \sim 23$ は、1区下層から出土したものである。21は受口状口縁甕、 $22 \cdot 23$ は端部に面をなす甕である。 $24 \cdot 25$ は、1区最下層から出土した。端部に面をなす甕(24)と、高杯脚(25)がある。26は、SD1を再掘削したSD1-aから出土した。27は、1区上層から出土した甕の口縁だが、器壁の摩耗が著しく、混入資料とみられる。SD1の時期よりも新しい布留式古相と推定される。

 $28 \sim 76$ は、SD1の2区から出土した。このうち $28 \sim 31$ は、SD1の2区最下層から出土したものである。28は、甑の底部で、30は緩やかに大きく広がる高杯脚部、31は2条の櫛描文をもつ高杯脚部である。 $32 \sim 39$ は、2区下層から出土した。32は、柱状の脚部をなす高杯である。 $34 \cdot 35$ は、端部が受口状をなす甕、36は端部を摘みあげ、面をもつ甕である。 $37 \cdot 38$ は甕あるいは壺の底部、39は、穿孔をもつ甑底部である。 $40 \sim 71$ 、 $72 \sim 76$ は、2区から出土した。40は口縁部と肩部の接合面を欠損するが、長頸壺とみられる。41もまた口縁部と頸部の接合面が確認できないが、99+成形を施す短頸壺とみられる。42は筒状の頸部に、口縁部が屈曲して開く広口壺である。 $43 \sim 54$ はいずれも甕の口縁部であり、「く」字口縁をなすもの $(43 \sim 47)$ 、短く立ち上がり面をなすもの(48)、受口状口縁 $(49 \sim 56)$ をなすものがある。 $50 \sim 54$ の受口状口縁甕の口縁部外面に施される列点文には、櫛状工具によるもの $(50 \cdot 53)$ や、板状工具によるもの $(51 \cdot 52)$



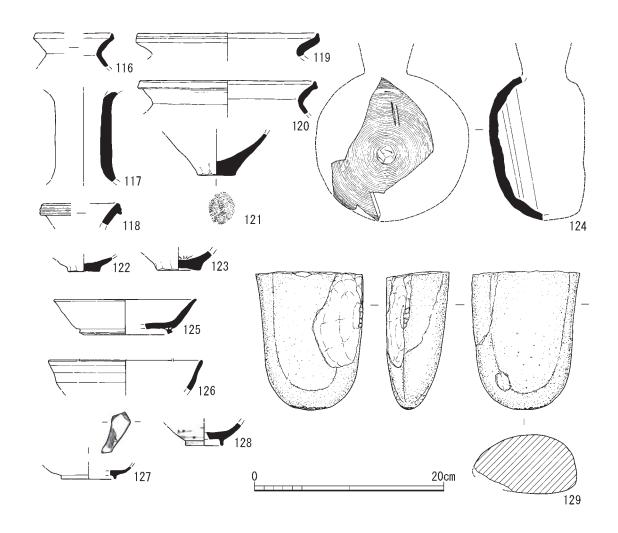
第23図 出土遺物実測図(2)



第24図 出土遺物実測図(3)

(52.54)がある。(57.54)がある。(57.54)がある。(57.54)がある。(57.54)がある。(57.54)がある。 62.63は、鉢の底部である。64は、器台の口縁部で、口縁部外面に2条の沈線をもつ。65~67は、 器台あるいは高杯の裾部である。68~71は、高杯脚部である。68は、脚の軸部径が大きなもの である。69は柱状脚であり、70は緩やかに広がる脚をなす。71は緩やかに「ハ」字状に開く高杯 脚部である。 $72 \sim 76$ (第24図)は、いずれも2区から出土した。72は高杯脚で、脚上半は中実を なし、裾部は緩やかに広がる。74は3方向に透かしを穿つ高杯脚部である。75は外面に縦方向の 丁寧なミガキを施し、内面に絞り痕を明瞭に残す。76は屈曲して「ハ」字状に開く高杯である。 77~115は、溝SD1の3区から出土した。このうち77.78は、3区最下層から出土した。77 は細片であるが、端部を短く立ち上げる甕口縁部である。78は、中空の器台の脚部とみられる。 脚部に傾斜変換点をもつことから、東海系器台の系統を引くものとみられる。79 ~ 91は、3区 下層から出土した。79は、台付鉢の脚部とみられる。80・81は受口状口縁甕で、82は「く」字口 縁甕である。83は、高杯の口縁部とみられる。84・85は、垂下する口縁をなす器台の受部である。 84には、一部竹管文が施文される。87は、口縁端部に面をなす鉢である。88は、受口状口縁甕の 一部で、端部に櫛描列点文を施す。89は平底の壺底部で、90は壺底部はいわゆる底部輪台技法に よる窪み底をなす。91は、タタキ甕の底部である。92~114は、3区埋土および3区上層として 取り上げたものである。92は小形の長頸壺で、体部内外面にハケを施す粗製品である。93は、小 さな平底をなす鉢で、鉢体部が屈曲して立ち上がり、明瞭な稜線をもつ。口縁端部に1条の沈線 が認められる。94は、大きく外反する高杯の口縁部とみられる。95は、「く」字口縁をなす甕で、 頸部が緩やかに屈曲する特徴をもつ。体部はタタキ成形により、内面はナデ調整によって仕上げ られる。96は、器壁の摩耗が著しいが、緩やかに屈曲する「く」字口縁をなす甕の一部である。 また97も、「く」字口縁甕の一部であるが、頸部に明瞭な屈曲をなすタイプとみられる。98・99は、 口縁端部が立ち上がり、面をなす甕の一部で、古墳時代初頭に特徴的な口縁部形態である。また 102は、受口状口縁の系譜にある甕の口縁部である。103・104は、いずれも受口状を呈する甕の 口縁部であるが、特に104は、端部の引き出しが明瞭で、近江系受口状口縁甕の特徴をよく残し ている。105 ~ 108は、壺あるいは甕の底部である。109 ~ 112は、高杯の脚部である。109は3 方向に透かしを穿ち、外面に丁寧なミガキが施されるもので、101は4方向に透かしがみられる。 111は脚上半が中実となり、112は柱状の脚柱部をなす。113は、高杯あるいは器台の裾部である。 114は、手づくね土器の鉢である。全体(図化資料数49)に、SD1の甕の組成は、「く」字口縁甕 31%(うち摘みあげ口縁4%)、受口状口縁甕35%、口縁端部が立ち上がり、面をなす受口状口 縁甕との折衷的な要素をもつ甕20%、有段口縁甕などその他14%である。SD1は時期幅があり、 脚径の大きい高杯や甕にみる近江系および折衷系の比率が50%を超えるなど古い要素を示すー 方、摘みあげ口縁の甕などに新しい要素が見え、おおよそ弥生時代後期後葉~古墳時代初頭(庄 内併行期古相)に位置づけることができる。なお、115の布留式甕は、SD1の精査中に出土した ものである。布留3式新相に位置づけられるもので、古墳時代中期前葉の資料である。

満SD5(第25図116·117) 116·117は、ともに口縁端部に面をなし、端部を摘みあげる「く」



第25図 出土遺物実測図(4)

字口縁甕である。119は、口縁端面に1条の沈線を施す。

溝SD6(第25図118~120) 118は、垂下口縁の壺で、口縁部外面に擬凹線文を施す。119・ 120はいずれも甕で、119は口縁端部外面に一条の沈線をもち、120は端部に面をなす。

溝SD15(第25図121・122) 121は、端部に面をなす「く」字口縁甕である。口径は、18.4cm を測る。122は平底の壺底部で、木葉痕が認められる。弥生時代後期後葉の資料である。

満SD1・13合流部(第25図123) 123は、弥生土器の壺の底部である。平底をなす。

溝SD1上層精査(第25図124) 124は、溝SD1-1区において、最上層から出土した須恵器 提瓶の体部である。今回の調査における古墳時代後期の土器は、本資料のみである。

掘立柱建物跡 S B 20(第25図125) 125は、須恵器杯 B である。口径14.8cm、器高3.7cmを測る。 杯部の立ち上がりがやや浅く、口縁部が外方に開くことから、奈良時代後半の資料とみられる。

包含層等 (第25図126~129) 126は、1区北部精査中に出土した須恵器杯の一部である。 127・128は、2区西拡張部で出土した染付である。また129は、撹乱土中から出土した石製品で ある。弥生時代中期の石斧の未製品の可能性があるが、自然面を残す小口側に敲打痕が認められ ることから、敲石として使用されたとみられる。 (高野陽子)

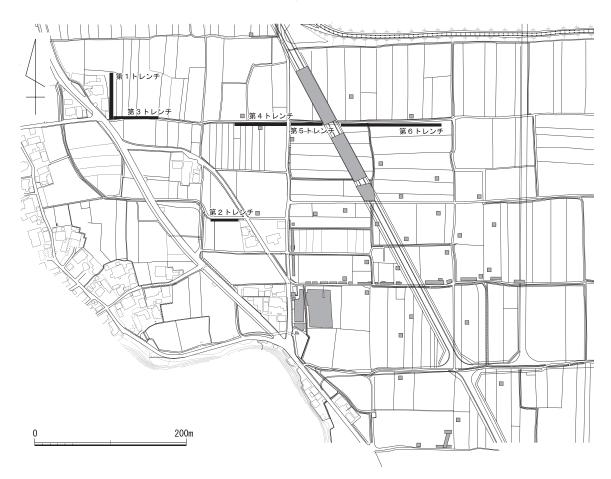
[2]野条遺跡第19次(平成23年度)

1. 調査の概要

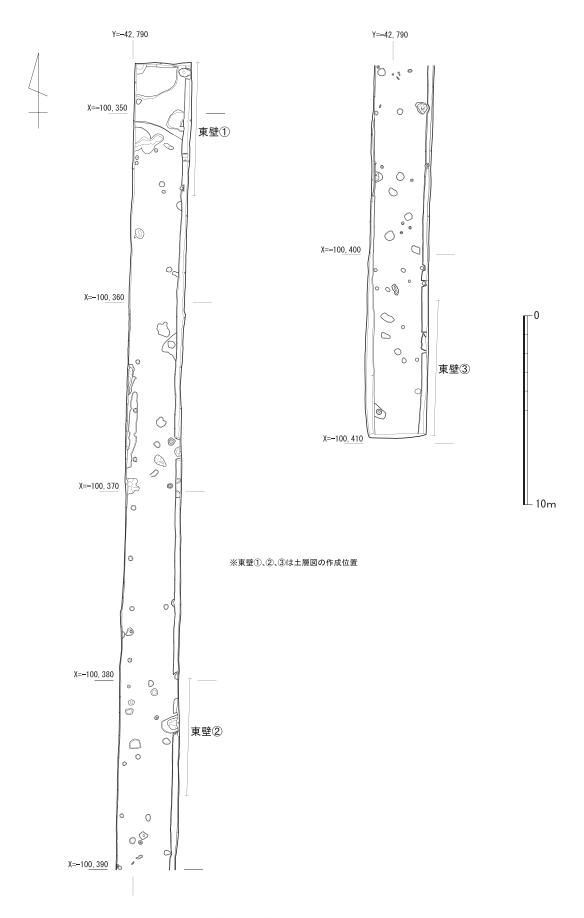
調査対象地は、盆地内の低地部で、現在は水田地帯である。東西に伸びる 2 本の排水路に対して設定したトレンチは計 6 か所で、北側の排水路部分には第 $1 \cdot 3 \cdot 6$ トレンチを西から順に設定した。南側の排水路部分には第 2 トレンチを設定した。第 4 トレンチのみ 3 つの小トレンチに細分し、調査を実施した。各トレンチの配置については、第 26 図のとおりである。なお、今年度は、当センターの調査と併行し、南丹市教育委員会(第 20 次調査)および京都府教育委員会(第 21 次調査)による、同排水路部分の発掘調査が実施されている。両機関による調査区は、当センターの第 3 トレンチと第 4 -1 トレンチの中間に設置された。

(1)第1トレンチ(第27・28図)

第1トレンチは、今回の調査区の中では、唯一南北方向に長い調査区で、面積は180㎡である。 発掘調査着手前の現状は畑であった。遺構面は、表土(現代の耕作土)、水田床土の直下の東壁第 29~34層の上面である。遺構面の深度は、トレンチ中央部および南部では、表土面から20~ 30cmであるが、トレンチ北部ではやや深く、表土面から約50cmを測る。遺構面は1面で、小ピ

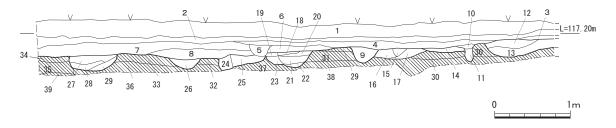


第26図 第19次調査トレンチ配置図



第27図 第1トレンチ平面図

東壁①

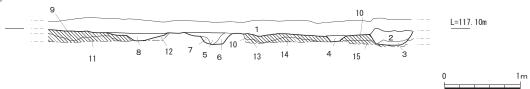


- 1. 表土 (耕作土)
- 2. 灰褐色シルト質粘土 (7.5YR4/2) (固 15. 黒褐色粘質シルト (10YR3/2) く締まる。水田床土)
- 3. 極暗褐色粘質シルト (7.5YR2/3)
- 4. 極暗褐色粘質シルト (7.5YR2/3)
- 5. 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2)
- 6. 暗灰黄色シルト質粘土 (2.5Y4/2)
- 7. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1)
- 8. 灰黄褐色 シルト質粘土 (10YR4/2)
- 9. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1)(12 より明るい)
- 10. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
- 11. にぶい黄褐色粘質シルト (10YR4/3)
- 12. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)
- 13. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3)

- 14. 褐色粘質シルト (10YR4/4)
- 16. にぶい黄褐色シルト質粘土 (10YR5/4)
- 17. 褐色シルト質粘土 (10YR4/4)
- 18. 黒褐色 シルト質粘土 (10YR2/2)
- 19. 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3)
- 20. 黒褐色 シルト質粘土 (10YR3/2)
- 21. 暗オリーブ褐色粘土 (2.5Y3/3)
- 22. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) (黄褐色 ブロック含む)
- 23. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4)
- 24. 褐色ブロック質シルト (10YR4/4) (黄 褐色ブロック混じり)
- 25. 暗褐色シルト (10YR3/4)
- 26. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4)

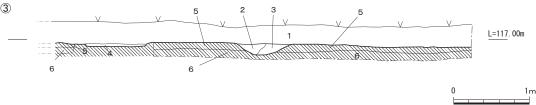
- 27. 黒褐色 シルト (10YR3/2)
- 28. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4)
- 29. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) (29より 粘質が弱い)
- 30. 暗灰黄色粘質シルト (2.5Y 4/2)
- 31. にぶい黄褐色シルト質粘土 (10YR5/4)
- 32. にぶい黄褐色粘質シルト (10YR5/4)
- 33. 黒褐色粘質シルト (10YR3/1)
- 34. 黒褐色粘質シルト (10YR3/1)
- 35. 暗褐色シルト (10YR3/3)
- 36. 黄褐色粘質シルト (10YR5/6) (地山) 37. 明黄褐色シルト質粘土 (10YR5/8) (地山)
- 38. 明黄褐色シルト質粘土 (10YR5/8) (地山)
- 39. 黄褐色粘質シルト (10YR5/6) (地山)

東壁②



- 1. 表土(耕作土)
- 2. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4)
- 3. 褐色粘質シルト (10YR4/6)
- 4. 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3)
- 5. 暗褐色シルト (10YR3/3)
- 6. 褐色粘質シルト (10YR4/4)
- 7. 褐色粘質シルト (10YR4/4)
- 8. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)
- 9. 褐色粘質シルト (10YR4/4)
- 10. にぶい黄褐色シルト質粘土 (10YR4/3)(地山)
- 11. 黄褐色粘質シルト (2.5YR5/4)
- 12. 褐色シルト質粘土層 (10YR4/4)
- 13.12 と同一層
- 14.12 と同一層
- 15.12 と同一層

東壁③



- 1. 表土(耕作土)
- 2. 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2)
- 3. 黄褐色シルト質粘土 (2.5Y5/4)
- 4. 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2)
- 5. にぶい黄色シルト質粘土 (2.5Y6/4)
- 6. 暗黄褐色シルト質粘土 (2.5Y7/6)

第28図 第1トレンチ東壁土層断面図

ット・土坑・溝状遺構などを検出した。トレンチ中央部以南ではピット・小土坑が密に分布し、中央部以北には溝状遺構・土坑などがやや疎らに分布する。遺構埋土の土色は暗褐色〜黒褐色を呈する。また、埋土の土色が緑灰色を呈するピットをトレンチ中央部以南で検出したが、現代の耕作に伴う稲木などの痕跡と考えられる。遺構の深度は概して浅く、平面プランの不明確なものが多い。

トレンチの土層については、特に調査区中央部から南部にかけて、ほぼ同一の堆積層が単純な水平堆積を示すことから、記録を取る地点を選択し、調査区北部、中央部、南部の3地点で、各々約5m分の長さに限定して東壁の土層堆積状況を記録した。遺構面の上層からは、庄内式期~布留式古段階の遺物が1点出土したが、堆積状況、土質から近世以降の堆積層と考えられる。そして、各地点における遺構面の土層を観察すると、トレンチの北部では暗褐色、黒褐色シルト層で遺構が検出されるが、調査区の中央部および南部ではこれらの土層が確認されず、にぶい黄褐色、にぶい黄色シルト層で遺構が検出される。遺構面を断ち割ると最下層で黄褐色~明黄褐色の堅緻な粘土質シルト層あるいはシルト質粘土層が検出されるが、遺構検出面からこの層に至るまでの深度は、調査区北部で20cm、中央部および南部で10cmを測る。既往の調査成果や周辺のトレンチの堆積状況から推定される堆積層序は、最下層から上層に向かって明黄褐色~黄褐色、にぶい黄褐色~にぶい黄色、暗褐色、黒褐色、黒色となり、土色は明から暗へ漸移的に変化する。トレンチの北部では、黒色土層が部分的に残存するのに対し、中央部、南部ではほとんど残存しないことから、特に中央部、南部では後世の削平の影響を強く受けているようである。

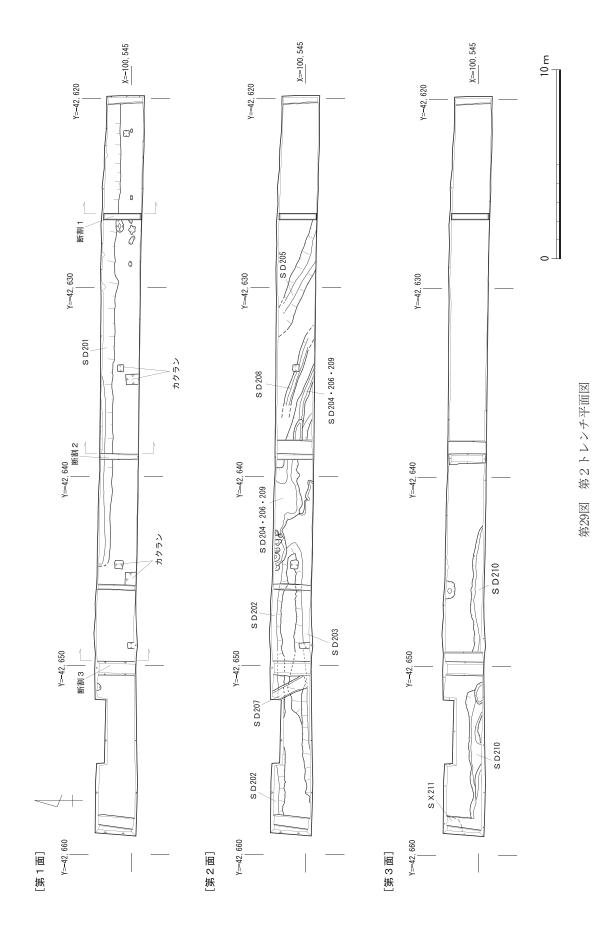
北部では削平の影響がやや少ないようであるが、旧地形が北に向かって下がるためであろう。本トレンチでは、遺構検出面の上層以外は、遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。また、調査区が狭長なため、ピット、土坑などの遺構についても、有意の配置が看取できなかった。遺構検出面の堆積状況や標高から見ると、この地点は後世の削平を被るまで遺跡全体の中で標高の高い平坦面あるいは西から東へ下がる緩斜面だったようである。

(古川 匠)

(2)第2トレンチ(第29~31図)

第1トレンチから南へ約140m、東へ120mに位置する。調査面積は80㎡である。調査区北隣には、新庄用水の支線である東西方向の現行水路が通る。調査区南側の隣接地では、平成21年度に南丹市教育委員会が実施した第18次調査で弥生時代の遺構・遺物が検出されている。

1)第1遺構面 第1遺構面は、地表面下0.4mの東壁第6層・断ち割り1の第4層上面である。 遺構検出面からは弥生土器片、奈良時代の須恵器杯蓋片、11世紀後半~12世紀の白磁壺底部等 が出土している。第1遺構面では、東西方向の溝SD201のほか、攪乱数基を検出した。SD201 はトレンチ中ほどから東端までの北壁に沿って検出した溝である。調査区中央付近から西では検 出できなかったが、徐々に浅くなって検出されなくなることから、削平を受けているようである。 検出した幅は南肩から中心部付近までで全長24.5m以上、最大幅0.8m以上、深さは検出範囲内で 最大16cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、出土遺物の多くは弥生土器片であるが、12世紀後半



-34-

の瓦器椀が1点出土しており、遺構の時期を示す遺物と考えられる。現行の水路と位置がほぼ重 複し、主軸方向も一致している。

2)第2遺構面 第2遺構面は地表下0.5mで確認した。土層断面でみると断ち割り2の第4層の上面に相当する。調査区北壁では堆積していないが、第2遺構面の構成層はトレンチ全体に広がっており、多くの弥生土器片が出土している。検出した主な遺構は、東西方向の溝2条(SD202・203)と、北西から南東方向の軸をやや異にする溝4条(SD204~208)である。SD203・204・206から出土した須恵器の時期から、遺構の時期は6世紀後半~7世紀初頭を中心とするようである。

溝SD202 トレンチ西端から北壁に沿って検出した溝である。西壁からおよそ7mの地点でSD207に、12mの地点でSD204に切られ、トレンチ東部では検出できなかった。遺構の南肩部のみ検出したが、全長13.5m以上、全幅0.75m以上、深さは検出範囲で最大12cmを測る。暗褐色粘質土を中心とする埋土からは弥生土器片が出土した。SD204・206よりも古い遺構であることから、6世紀末以前の遺構と考えられる。

溝SD203 トレンチ西端部から南壁に沿って検出した溝である。SD202とほぼ平行し、調査区中央でSD202と合流するようである。西壁からおよそ8mの地点でSD207に切られ、およそ17mの地点でSD204に切られる。SD202とは逆に北肩部のみ検出しており全長13m以上、全幅1.2m以上、深さは検出範囲で最大17cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、弥生土器片のほかに古墳時代後期の須恵器片1点が出土した。出土遺物の時期と遺構の切り合い関係からSD203は6世紀後半~末頃に埋没するようである。

溝SD204・206 トレンチ中央部で検出した溝状の遺構で、幅3m、深さ30cmを測る。当初、別の遺構と認識していたが、調査の結果、同一遺構と判断した。埋土は暗褐色粘質シルトと黒褐色シルトからなり、弥生土器片のほか須恵器杯身が出土した。須恵器の形態から、6世紀末~7世紀初頭頃の遺構と考えられる。

溝SD205 トレンチ東部で検出した溝状の遺構で、全長4m以上、幅1m、深さ10cmを測る。 埋土は黒褐色シルトで、弥生時代後期の土器片が出土した。

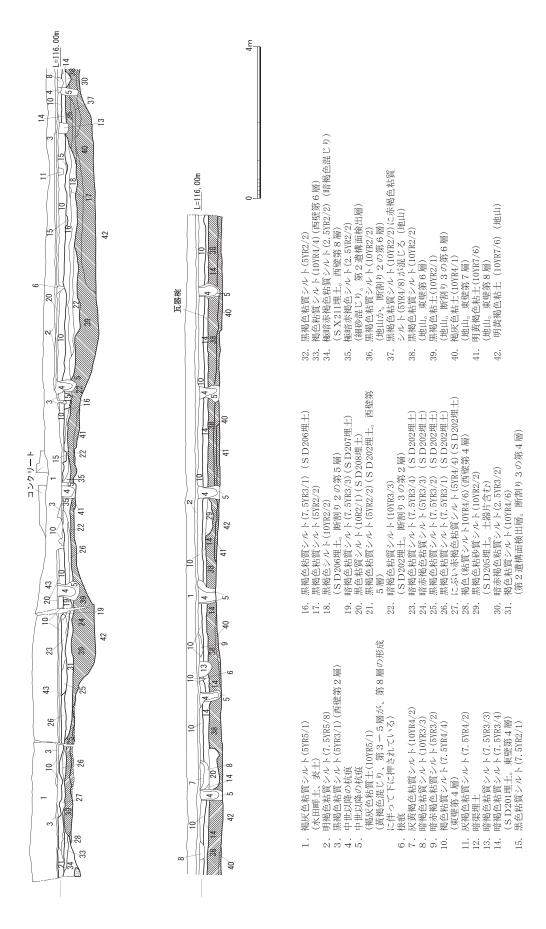
溝SD207 トレンチ西部で検出した。全長2m以上、幅0.6m、深さ22cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで、弥生時代後期の土器片が出土した。SD203との重複関係から6世紀後半以降に比定される。

溝SD208 トレンチ東部で検出した。全長4m以上、幅0.4m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、弥生時代後期の土器片が出土した。

不明遺構 S X 209 S D 204・206と重複する不定形の遺構である。南北0.6m以上、東西 2 m の規模である。掘形が不整形で、底の凹凸が顕著である。

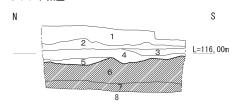
3) 第3遺構面 第3遺構面は地表下0.7mの黒褐色粘土層および粘質シルト層(北壁第5・18・25層)の上面である。検出した遺構は東西方向の溝1条(SD210)と不明遺構(SX211)である。

SD210 上層のSD203のほぼ真下に位置し、蛇行しながらわずかに南東~北西を向く溝状



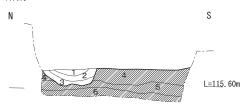
第30図 第2トレンチ北壁土層断面図

トレンチ東壁



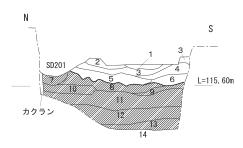
- 1. 褐灰色粘質シルト (5YR5/1) (表土)
- 2. 明褐色粘質シルト (7.5YR5/8) (表土)
- 3. 灰褐色粘質シルト (7.5YR5/2) (表土)
- 4. 褐色粘質シルト (7.5YR5/2)
- 5. 暗褐色粘質シルト (7.5YR3/4) (SD201 埋土)
- 6. 褐灰色粘土 (10YR4/1) (地山。断割2の第4層)
- 7. 褐灰色粘土 (10YR4/1) (断割2の第5層)
- 8. 明黄褐色粘土 (10YR7/6) (断割2の第6層)

断割1



- 1. 黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) (SD201埋土)
- 2. 灰褐色粘質シルト (7.5YR4/2) (SD201 埋土)
- 3. 黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) (SD201埋土)
- 4 里褐色粘質シルト (10VR2/2) (地山。暗褐色まじり)
- 5. 褐灰色粘土 (10YR4/1) (地山)
- 6. 明黄褐色粘土 (10YR7/6) (地山)

断割2

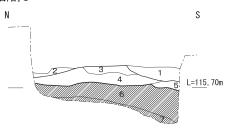


- 1. 黒褐色粘質シルト (10YR5/1) (SD202、SD203の埋土)
- 2. 黒色粘質シルト (7.5YR2/1) (SD202、SD203の埋土)
- 3. 暗褐色粘質シルト (10YR3/3) (SD 204・206 埋土)
- 4. 黒褐色粘質シルト (7.5YR3/1) (SD204・206埋土)
- 5. 黒褐色砂混じり粘質シルト (10YR2/2) 12. 黒褐色粘土 (10YR3/1)
- 6. 褐色粘質シルト (10YR4/6) (SD204・206 埋土)
- 7. 黒褐色粘質シルト (10YR2/2)

(褐灰色混じり)

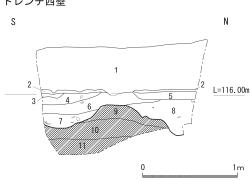
- 8. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) (黒褐色混じり)
- 9. 褐色粘質シルト (10YR4/6) (黒褐色混じり)
- 10. 黒色粘質シルト (10YR2/1)
- 11. 黒褐色粘土 (10YR3/1) (褐色混じり)
- 13. 黒褐粘砂質土 (10YR2/1)
- 14. 明黄褐色粘土 (10YR7/6)

断割3



- 1. 暗褐色粘質シルト (10YR3/3) (SD203埋土)
- 2. 暗褐色粘質シルト (10YR3/3) (SD202埋土)
- 3. 褐灰色粘質シルト (10YR4/1) (第1遺構面検出層)
- 4. 褐色粘質シルト (10YR4/6)
- (褐灰色粘土少量混じる。 第2遺構面検出層)
- 5. 黒褐色粘砂質土 (10YR3/2) (SD210埋土)
- 6. 黒褐色粘土 (10YR2/1)
- 7. 明黄褐色粘土 (10YR7/6)

トレンチ西壁



- 1. 表土
- 2. 黒褐色粘質シルト (5YR3/1)
- 3. 黒褐色粘質シルト (7.5YR3/2)
- 4. 褐色粘質シルト (10YR4/6)
- 5. 黒褐色粘質シルト (5YR2/2)
- 6. 褐色粘質シルト (10YR4/4)
- 7. 黒褐色シルト (10YR3/2)
- 8. 極暗赤褐色粘質シルト (2.5YR2/2) (暗褐色粘質シルト混じり。 土器片 混じる)
- 9. 褐灰色粘質シルト (5YR4/1) (地山。暗褐色粘質シルト混 じり)
- 10. 黒褐色粘土 (10YR2/1) (地山。断割り3の第6層)
- 11. 黒褐色シルト (10YR2/1) (地山。断割り2の第13層)

第31図 第2トレンチ断ち割り土層断面図

遺構である。SD210とSD203は位置がほぼ重複し、主軸方向も同一であるが、土質の異なる第2遺構面構成層(断ち割り3の第4層)がSD203とSD210の間に確認できることから、下層の別遺構と判断した。トレンチ西端から南壁に沿って検出した。西壁からおよそ8mの地点でSD207に切られ、およそ16mの地点でトレンチ南方へ外れる。SD203と同様に北肩部のみ検出しており、全長16m以上、幅0.6m以上、深さは検出範囲内では最大40cmを測る。埋土である黒褐色粘砂質土から弥生時代後期末~古墳時代初頭の遺物が出土している。SD210はSD203・207に切られることから、遺物の出土位置が遺構の底部付近と考えられる。

不明遺構 S X 211 トレンチ北西隅で検出した遺構である。トレンチ西壁の土層から、南北 0.9m以上、東西2.2m、深さは最大48cmと推定される。弥生土器の甕口縁部が出土している。

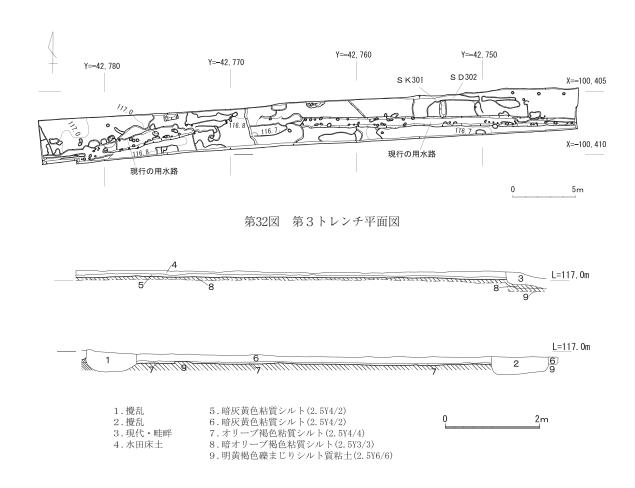
4)第3遺構面下層 第3遺構面下層では、褐灰色〜黒褐色の粘質土及び粘土が堆積し、地表面下0.95m~1.6mで、トレンチ全面に明黄褐色粘土層を確認した。トレンチ西端、西部、中央部西側の3か所には谷状の落ち込み地形があり、その最深部で地表下1.6mを測る。いずれの層においても遺構・遺物は確認できなかった。

第2トレンチでは弥生時代後期末~古墳時代初頭、古墳時代後期~終末期、中世の遺構を検出した。トレンチ幅が狭小のため全容が明らかでないものが多いが、第2・3面の遺構は、概ね北西から南東方向を志向しており一定の方向性がうかがえる。これは調査区の西に位置する筏森山からの自然地形に由来するものと考えられる。SD201は出土遺物から平安時代末の水路跡と考えられる。新庄用水の原形とみられる水路が開削されたとされる時期と近く、支線であった可能性が高い。また、これが北接する現行水路の前身であるならば、周辺の現行水路及び地割りの出現は平安時代末まで遡る可能性を帯びる。出土遺物に古墳時代後期~終末期の須恵器片が含まれるが、SD204からも同時期の須恵器片が出土しており、この時期に流路の画期がうかがえる。SD210から出土する弥生土器片が溝底部の粘質土に張り付くようにして出土する様相は、第17次調査の溝SD1の遺物出土状況とよく似ている。また、SD210はトレンチ中央部で南側調査区外へ伸びており、その延長方向に第17次調査の溝SD1が伸びていることから、同一の溝である可能性がある。しかし、第17次調査の溝SD1と比べSD210は浅く、後世に削平を受けているようである。上層の遺構・包含層から出土した多くの弥生土器片は、本来SD210に伴う遺物であろう。

(大髙義寛)

(3)第3トレンチ(第32・33図)

第3トレンチは、第1トレンチの南東端に接するように設定した東西方向のトレンチで、面積は130㎡である。本トレンチの東には南丹市教育委員会による第20次調査のトレンチが隣接する。地表面から順に、現代の水田耕作土、水田床土、暗灰黄色粘質シルトが堆積しており、この下位で遺構面を確認した。遺構面の深度は、水田床土上面から15~20cmを測る。第1トレンチに近いトレンチ西端から約9mの地点までは暗オリーブ褐色土層の上面が遺構検出面で、標高は117.0mである。しかし、この地点から東では、暗オリーブ褐色土層が確認されず、代わりに、そ



第33図 第3トレンチ北壁土層断面図

の下層と考えられる明黄褐色土層が遺構検出面を形成している。この面の標高は116.8mである。 遺構検出面の変化地点は現況の水田の畦畔と一致しており、段状の水田形成による削平を受けて いるようである。

遺構の分布状況もこの地点を境に大きく異なっており、この地点以西の標高の高い遺構面では、 掘形が隅丸方形の柱穴や溝状遺構が検出されている。遺物は出土しなかったが、野条遺跡の既往 の調査で古代の掘立柱建物跡が複数検出されていることから、柱穴の帰属時期は古代の可能性が ある。ただし、古代の遺構は第3トレンチから離れた地点で検出されているため、直接的に関連 づけることはできない。調査区中央部~東部では、削平の影響を受けたためか、遺構の残存状況 は悪い。また、第3トレンチは西から東に向かって次第に現代の農道・用水路と重複するように なるため、これらの施設の造成に伴う削平も受けている。

第3トレンチの中央部からやや南寄りの地点には、調査着手前まで利用されていた用水路が存在する。この用水路は、調査対象地の西隣で北から南に流れる新庄用水に接続している。周辺の調査成果から、野条遺跡の地割が古代・中世まで遡ることが判明しており、この用水路の時期についても注目されるところである。しかし、用水路の埋土から、昭和10年代の1銭銅貨が出土したことから、現在の位置を流れるようになったのは比較的最近のようである。

第3トレンチでは、小ピット、隅丸方形の柱穴、土坑、溝状遺構などを検出した。このトレン

チからはほとんど遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。また、調査区が狭いため、遺構についても有意の配置が看取できなかった。遺構検出面の堆積状況や標高から見ると、この地点は第1トレンチと同様に、野条遺跡の中では比較的標高の高い平坦面、あるいは西から東へ下がる緩斜面であったようである。中世に水田となる以前は、建物あるいは塀などが建っていた可能性がある。

土壙SK301 調査区中央部東寄りで検出した。南北に長い隅丸方形で、平面規模は1.3×0.6m、深さは20cmを測る。埋土は黒褐色から暗褐色を呈する。形状から土壙墓の可能性があるため、土層の確認を併行しながら慎重に掘り下げたが、副葬品は出土せず、木棺の痕跡等も確認されなかった。

満状遺構 S D 302 トレンチの中央部から東部にかけて検出した東西方向の溝状遺構である。 時期は不明であるが、前述の用水路と平行しており、現行水路の前の用水路はこの地点を流れていた可能性がある。

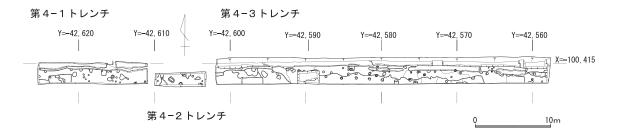
(4)第4トレンチ(第34図)

第4トレンチは、第3トレンチから約120m東に設定した調査区である。本トレンチの西には、 京都府教育委員会が実施した第21次調査のトレンチが隣接する。第4トレンチでは、3つの小地 区に細分して発掘調査を実施した。各トレンチの位置は第34図のとおりである。

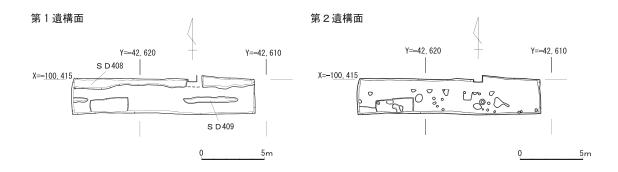
1)第4-1トレンチ(第35・36図) 第4トレンチの中で最も西に設定したトレンチで、面積は45㎡である。調査着手前の現況は、水田および東西方向の用水路である。本トレンチの遺構面は2面存在する。第1遺構面は表土直下で、表土から深度約15cmの西壁第2層および南壁第3層の上面である。第1遺構面で検出した遺構は、溝SD408・409である。

溝SD408 現行の用水路と重複し、主軸方向が一致する東西方向の溝である。遺構の南肩は本トレンチ内で検出されるが、北肩は調査区外になる。SD408の規模は、幅0.7m以上で、深さは $0.6 \sim 0.7$ mである。埋土は黒灰色の粘土で、部分的に礫が混じる。流水および滞水環境を示す。本トレンチ内では遺物が出土していないため時期は不明であるが、検出位置と標高から、後述する第4-3トレンチの溝SD401と同一遺構と考えられる。

溝SD409 調査区中央部で検出した幅約0.5m、深さ約30cmの小規模な東西方向の溝である。埋土の土色は褐色を呈する。東西に延伸するようで、第4-2トレンチのSD410と第4-3トレンチで検出されたSD407は同一遺構の可能性がある。また、西隣の第21次調査トレンチでも



第34図 第4-1・4-2・4-3トレンチ平面図



第35図 第4-1トレンチ平面図

南壁 L=116.0m 12 10 カクラン 13 13 9 8 カクラン 2m 7/XX//// 7. 暗オリーブ褐色シルト質粘土(2.5Y3/3) 1. 水田床土 8. 黒褐色粘質シルト(2.5Y3/2) 9. 黒褐色シルト質粘土(2.5Y3/1) 2. 黒褐色シルト質粘土(2.5Y3/2) 3. 黒褐色粘質シルト(10YR2/2) 10. 黒褐色シルト質粘土(2.5Y3/1) 11. 黒褐色シルト質粘土(2.5Y3/1) 4. 暗褐色粘質シルト(10YR3/4) 5. 黒褐色シルト質粘土(2.5Y3/1) 12. 黒色粘質シルト(2.5Y2/1)締まり弱い 6. 暗オリーブ褐色粘質シルト(2.5Y3/3) 13. 暗灰黄色シルト質粘土(2.5Y4/2) 西壁 1. 南壁第1層と同一層 L=116.0m 2. 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト 2 3. 南壁第2層と同一層

第36図 第4-1トレンチ土層断面図

4. 南壁第12層と同一層 5. 南壁第13層と同一層

埋土、規模の近似する溝状遺構が検出されている。

第2遺構面は、第1遺構面から下に約15cm下の第12層上面である。ピットを20基以上検出したが、埋土の色調・土質が第12層とよく似ているため第12層上面では検出できず、ほとんどのピットは下層の第13層上面で遺構と認識した。各ピットから遺物は出土しなかったが、第12層の掘削中に、土師器片が数点出土した。遺物の帰属時期は明確にできなかったが、ピット群あるいは第12層に包含される遺物と考えられる。

2) 第4-2トレンチ(第 $37\cdot 38$ 図) 第 $4-1\sim 3$ トレンチの間に設定したトレンチである。調査前の現状は水田で、面積は11㎡である。第4-1トレンチと同様に遺構面が2面存在する。

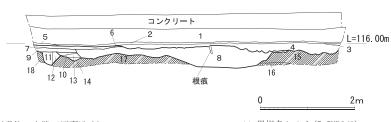
第1遺構面は、表土面(コンクリート舗装直下)から約0.3m下の、北壁第7層および東壁第5層の上面である。第1遺構面で検出された遺構は、溝5D411である。ただし、この溝は平面的にプランを確認できず、断面観察で確認したのみである。溝5D411は、後述する第4-3トレ

第1遺構面 第2遺構面 Y=-42, 610 Y=-42, 605 Y=-42, 610 Y=-42, 605 S D411 **e**600 X=-100, 417 X=-100, 417

第37図 第4-2トレンチ平面図

5m

北壁



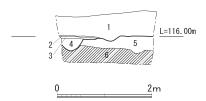
- 1. 攪乱 (現代の水路石垣裏込め)
- 2.酸化マンガン層
- 3. 黄灰色シルト(2.5Y4/1)
- 4.極暗褐色シルト (7.5YR2/3)(SD411埋土)
- 5. 灰黄褐色粘質シルト(10YR4/2)(締まり強い)
- 6. 黒色砂質シルト(10YR1/1)
- 7. 黒褐色シルト(10YR3/2) (締まり強い)
- 8. 黒色シルト(10YR2/1)(やや砂質。)
- 9. 黒褐色粘質シルト(10YR3/2)(締まり強い)
- 10. 黒色シルト(10YR2/1) (やや締まり強い)

- 11. 黒褐色シルト(7.5YR2/2)
- 12. 暗赤褐色粘質シルト(5YR3/2)
- 13. 黒色粘質シルト(10YR2/1)
- 14. 黒色粘質シルト(10YR2/1)(13より色調暗い)

5m

- 15. 暗褐色砂質シルト(10YR3/4)
- 16. にぶい褐色粘質シルト(7.5YR5/4)
- 17. 暗褐色砂質シルト(10YR3/4)
- 18. 暗褐色粘質シルト(10YR3/4)

東壁

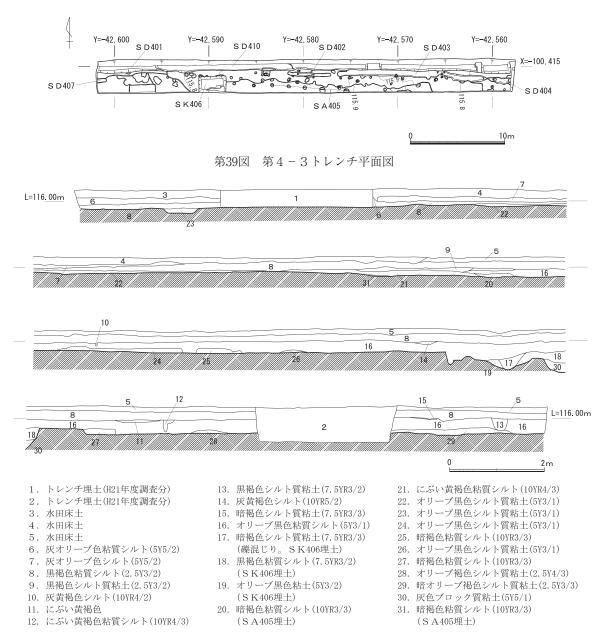


- 1. 北壁第1層と同一
- 2. 北壁第2層と同一
- 3. 北壁第3層と同一
- 4. 北壁第4層と同一
- 5. 黒褐色粘質シルト (10YR3/2)
- 6. 北壁第15層と同一

第38図 第4-2トレンチ土層断面図

ンチの溝SD409と同一遺構である。

第2遺構面は、表土面から約0.4m下の北壁第15·17層および東壁第6層の上面である。この 面では、ピット、土坑が点在している。平面的に検出できたのは、ピット9基、土坑7基である。 なお、第1遺構面と第2遺構面の間では、第9層上面に落ち込み状の遺構が存在するようである。 埋土の色・質がほとんど区別がつかないため、平面プランは確認できなかったが、断面図の北壁 第8層がこの落ち込みの埋土に相当する。この落ち込みによって、第2遺構面の遺構は削平を受

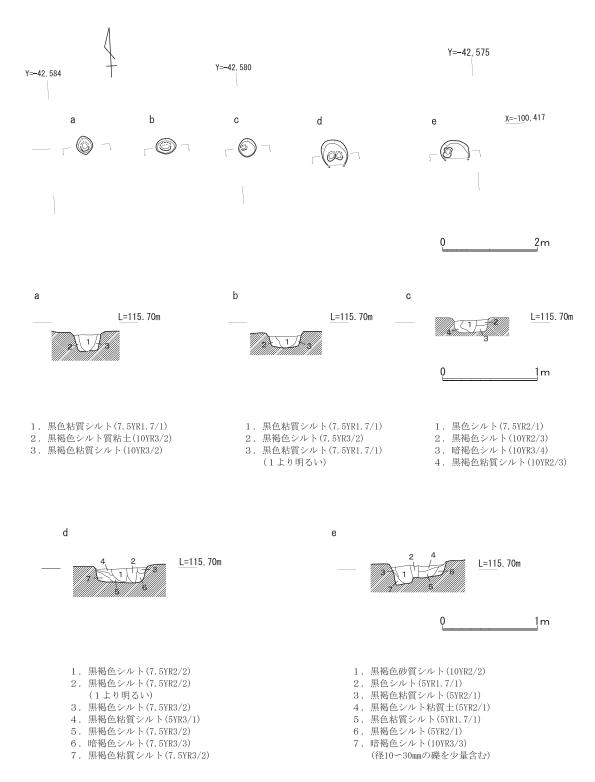


第40図 第4-3トレンチ南壁土層断面図

けている。これらの遺構面の遺構からは遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明であるが、 隣接する第4-1トレンチの第2遺構面と同一面であることから、古墳時代~古代と考えられる。

3)第4-3トレンチ(第39~41図) 第4トレンチの中で最も東に設定したトレンチで、面積は140㎡である。調査着手前の現況は、水田および東西方向の用水路である。第4-3トレンチの遺構検出面は1面で、現代の水田の床土上面から0.3~0.4m下の第31層上面に相当する。

溝SD401・410 現在の水路の直下で検出した。SD401・410は重複関係があり、SD410がSD401よりも新しい。しかし、平面プランの形状から、SD401・410は同一の溝と推定される。おそらく、SD410はSD401再掘削の平面プランであろう。SD401・410は本トレンチを貫き、調査区の東及び西に延伸するものと考える。調査区内で検出した限りでは、幅0.8m以上、深さ約35~50cmの規模である。肥前産の陶器瓶口縁部が出土しており、少なくとも近世後半には機



第41図 第4-3トレンチ柱穴列SA405平面・断面図

能していたようである。埋土は緑灰色粘土を主体とするが、黒灰色粘土、緑灰色礫も含んでいる。 そして、主軸方向がほぼ座標の東西方向を指向し、現代の用水路と一致することから、SD 401・410は現代の用水路の直近の前身水路と考えられる。また、埋土の特徴と位置、主軸方向から第4-1トレンチのSD408と同一遺構と考えられる。

溝SD402・403・404 SD401・410の南側で検出した東西方向の溝群である。SD402~

404は西から東へ一列に並んでいる。どの遺構も深度が浅く、後世の削平を被っているようである。 埋土の色・質はいずれも褐色の砂礫層で共通していることから、SD402~404は本来、同一の 溝であったと考えられる。SD403からは中国製青磁椀、白磁壺、瓦質土器などが出土しており、 中世前半に比定される。SD402~404は、東端でやや南に軸がずれるが、ほぼ真東西を指向する。

満状遺構SD407 SD402の約20m西で検出した。削平を受けているために途切れているが、 SD407を延長するとSD402~404に接続する可能性がある。

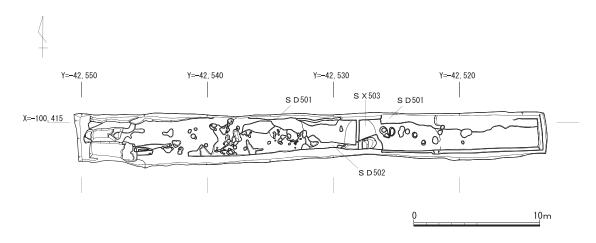
また、前述の通り第4-1・4-2トレンチでは、現代の水路と平行する東西方向の溝が検出されているが、いずれの溝も断面「U」字形の浅い溝で、溝幅も同規模である。したがって、細い溝ではあるが、各トレンチにわたり長く伸びる同一の溝である可能性がある。

土坑SK406 調査区中央西寄りで検出した方形の土坑である。東西2.9m、南北1.7m以上、深さ0.8~0.9cmを測り、他の遺構と比べ規模が突出している。SK406の埋土は、暗褐色・黒褐色・灰色の粘土層で構成され、SD401・410の埋土と近似した特徴を有する。遺物が出土しなかったため時期は不明だが、埋土の特徴と位置関係から、SK406とSD401・410は、同時期の一連の遺構であろう。SK406の機能としては、井戸等が想定される。

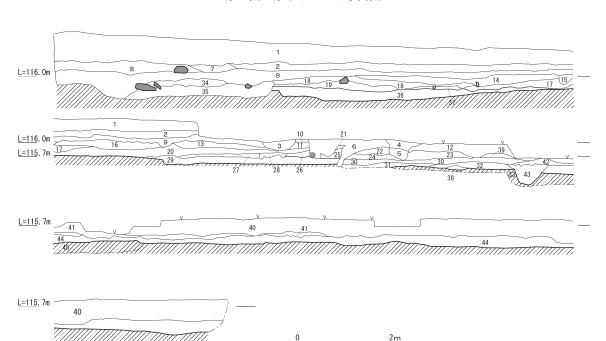
調査区の南部ではピット、土坑が一面に分布する。ピットには柱痕が検出されるものもあるが、 遺物は出土せず時期は不明である。調査区が東西に狭長であるため、検出したピット、土坑の配 置にはほとんど有意性が認められなかったが、唯一、柱穴列SA405のみを検出した。

柱穴列SA405 4間の柱穴列で、各々の柱穴に柱抜取痕が確認された。柱穴の規模は、西の3基がほぼ同規模で、径0.4mのいびつな円形を呈す。東の2基はやや規模が大きく、復元径0.6mのいびつな円形である。各柱穴の柱抜取痕の直径は0.1~0.2mを測る。東から2基目の柱穴では、柱痕を2本分確認した。この柱穴での柱痕の切り合い関係は不明瞭である。柱間距離は、西から3間は1.65~1.75mでほぼ均一であるが、東端の1間のみ2.5mを測り、離れている。調査範囲内では確定は不可能であるが、西の3間と東の1間は、別の遺構とも想定されうる。主軸方向は、座標東から南へ3度振っている。中世以降になると、この一帯は水田が形成されることから、柱穴列SA405は中世以前の遺構と考えられる。中世以前の建物としては、既往の野条遺跡の発掘調査で奈良~平安時代、12世紀代の掘立柱建物跡が確認されている。奈良時代~平安時代の建物の主軸方向は、座標北から西に数度振るか、東に数度振る2通りがある。対照的に12世紀代の建物の主軸方向は座標北を指向する。主軸方向から見ると、当トレンチのSA405は奈良~平安時代に帰属する可能性が高い。

第 $4-1\sim 4-3$ トレンチの遺構検出面の堆積層は、いずれも黒色土層を主体とする。第4-2トレンチでは断ち割りを行ったが、黒色土層の上面から0.3mの深度でにぶい褐色土層を確認した。第 $4-1\cdot 4-3$ トレンチと比べ、堆積層の残存状況は良好と言える。第4トレンチでは、古代~中世の土地利用の変遷を示す遺構・遺物を確認した。第4-3トレンチで検出した中世の溝 S D $402\sim 404$ は第 $4-1\cdot 4-2$ トレンチにまたがる可能性がある東西方向の溝であるが、水田地割との位置関係から、平安時代末期~鎌倉時代初頭に開削された新庄用水に接続する溝と



第42図 第5トレンチ平面図



- 1. バラス層(農道舗装)
- 2. にぶい黄橙色(10YR2/3)シルト
- 3. 崩落土
- 4. 崩落土
- 5. 崩落土
- 6. 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質極細砂 (杭跡)
- 7. にぶい黄橙色(10YR2/3)シルト (砂礫混じり)
- 8. にぶい黄橙色(10YR2/3)シルト
- 9. 灰黄褐色(10YR5/2)ブロック質土 (径50~150mmの礫を含む)
- 10. 第2層と同一層
- 11. 第9層と同一層
- 12. 第9・11層と同一層
- 13. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土
- 14. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト
- 15. 黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
- 16. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト
- 17. 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト

- 18. 褐灰色(7.5YR5/1)粘質シルト
- 19. 褐灰色(7.5YR5/1)シルト質粘土
- 20. 褐灰色(10YR5/1)シルト質粘土
- 第20層と同一層 21.
- 22. 第20層と同一層
- 23. 第20層と同一層
- 24. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土
- 25. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土 (第24層と同一層)
- 26. 暗灰黄色(2.5 / 5 / 2)シルト質粘土 (第24・25層と同一層)
- 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土 (第24~26層と同一層)
- 28. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土ブロック
- 29. 褐灰色(10YR5/1)粘土
- 30. 褐灰色(10YR5/1)粘土(第29層と同一層)
- 褐灰色(10YR4/1)極細砂
- (粘土、径5~10mmの亜円礫を少量含む)
- 32. 灰色(10Y4/1)粘土 (5~10mmの亜円礫を少量含む)

- 33. オリーブ黄色(7.5Y6/3)粘土 (締まり強い、地山)
- 34. 褐灰色(7.5YR5/1)粘質シルト
- 35. 褐灰色(7.5YR5/1)粘土
- 36. 褐灰色(7.5YR5/1)粘土
- 37. 第20層と同一層
- 38. オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘土
- 39. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘土
- 40. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質粘土
- 41. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質シルト
- 42. 灰色 (7.5Y6/1) シルト質粘土
- 43. オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト質粘土 (倒木痕跡)
- 44. 暗青灰色 (5B4/1) 粘土 (SD501 埋土) 45. オリーブ灰色 (7.5Y6/3) 粘土 (地山) ※第 38〜第 43 層は時期不明の溝埋土
 - (SD501の上層)

第43図 第5トレンチ北壁土層断面図

推測される。この水路は現代まで受け継がれて利用されているが、 $SD402 \sim 404$ は、その最古段階に近い遺構と考えられる。また、第4-3トレンチ $SD401 \cdot 410$ は、現代の水路とほぼ重複する水路で、これも新庄用水から取水した水路跡と考えられる。出土遺物から近世以降と考えられ、現代の水路の直近の水路の遺構と考えられる。

(5)第5トレンチ(第42~43図)

第5トレンチは、第4トレンチの東側に設定したトレンチで、調査面積は110㎡である。調査地の現況は畑、農道、用水路である。遺構面の残存状況は不良である。調査トレンチの大部分が現代の農道の直下であるため、削平を受けている。表土面から約 $0.65\sim1.1$ mの深度(第 $33\cdot45$ 層上面)で遺構面を検出した。遺構面は1面である。

溝SD501 第4トレンチと同様に、現在の水路の下層で検出した溝である。調査区の北端近くで検出されたため、幅は不明である。トレンチ内での深度は約15~25cmである。埋土は灰色の粘土で、第4トレンチの近世後半の溝と似ている。遺物は出土していない。位置関係と埋土の質から現行の水路の前身である可能性がある。

溝SD502 調査区東部で検出した、溝SD501と平行する小規模な溝である。長さ約0.6m、幅約0.5m、深さ約10cmである。遺物は出土しなかった。

倒木痕S×503 SD501・SD502にまたがって検出した。各遺構の形成順序は、SD501→ S×503→SD502の順のようである。

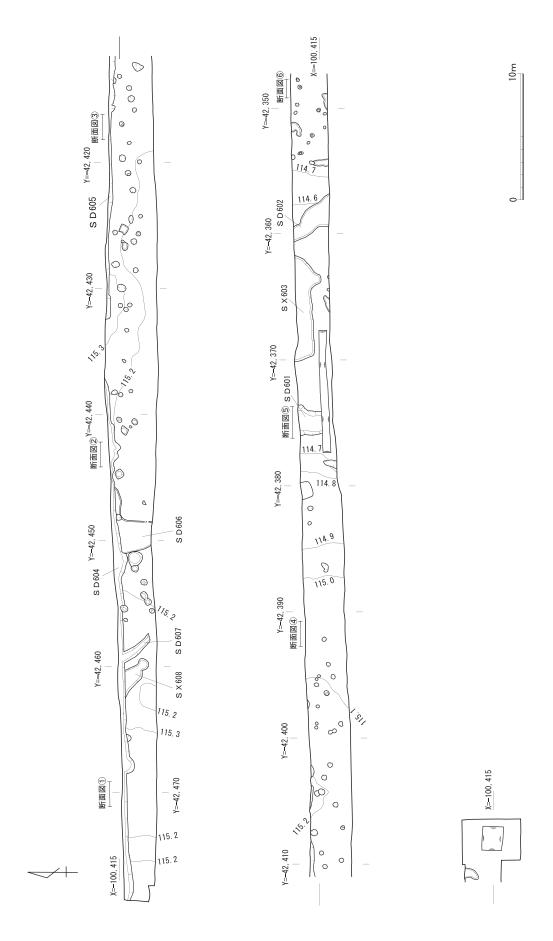
上記の遺構の他に、ピット、土坑を数基検出したが、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。ピットについては柱痕を検出したものが数基存在するが、有意の配置は見出されなかった。第5トレンチの遺構面は、明らかに西から東へ傾斜し、調査区西端では標高115.8m、東端では115.3mである。地山はオリーブ黄色~オリーブ灰色の粘土で、第4トレンチで見られる黒ボク層は検出されなかった。

(6)第6トレンチ(第44~47図)

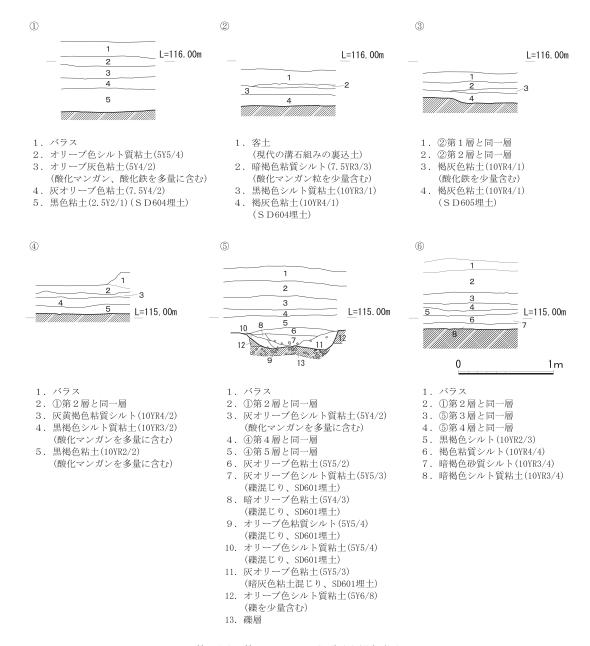
第6トレンチは、最も東に設定したトレンチである。調査面積は434㎡である。調査前の現状は、 水田、農道及び東西方向の用水路である。遺構面は1面で、西から東に向かって緩やかに下がる 地形を示す。堆積土は粘土が主体で、湿地性の堆積環境だったようである。

溝SD604・605 調査区北端部で検出した東西方向の溝で、東西に並んでいる。SD604・605間がトレンチ内では途切れるため、遺構番号を個別に付与したが、同一遺構と考えられる。SD604・605は現代の用水路と重複する位置にあたり、主軸方向も平行する。調査区中央部以東では検出されないが、これはトレンチが現代の用水路から少し離れるためである。幅0.6m以上、深さ30cm以上、全長65m以上の溝と考えられる。埋土は青灰色の粘土である。以上の状況から、現在の水路の前身と推定される。遺物は出土していない。

溝SD606 調査区西端から約30m東の地点で検出したSD604と直交する南北方向の溝である。幅2.5m、深さ10cmを測る。遺構の重複関係から、SD606はSD604よりも新しい。SD606は、埋土の質がSD604とほぼ同一で、また、現在の地表面で、SD606と重複する位置に用水路



第44図 第6トレンチ平面図



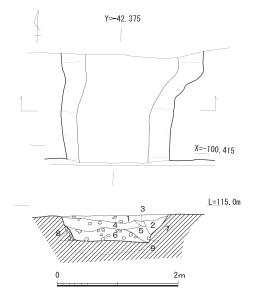
第45図 第6トレンチ北壁土層断面図

が存在することから、SD 606はこの用水路の前身の水路と推定される。遺物は出土していない。 **満SD607** SD606から約8m西で検出した北西~南東方向の溝である。SD604に斜交する。 SD604との新旧関係は不明である。現在の地割にはこの溝は踏襲されていない。

その他の遺構 SD607の西隣で倒木痕SX608を検出した。また、SD606・607の間ではピットが数基点在する。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

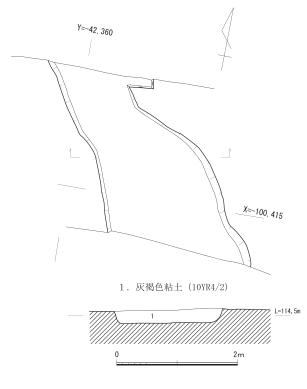
S D 605周辺の調査区中央部は、本トレンチの中で最も遺構が集中しており、ピットが60基以上分布する。しかし、各ピットの深さは10cm以下で、柱痕が検出されるピットも深度は浅い。 遺構の配置にも特段の傾向は見出されない。

中央部以東は次第に遺構の密度が薄くなる。明確な遺構は南北方向の溝SD601・602のみである。不定形の落ち込みSX603は泥湿地における自然堆積と考えられる。



- 1. 黄褐色シルト質粘土(2.5Y5/3)(礫を少量含む)
- 2. オリーブ色シルト質粘土(5Y5/6)
- 3. オリーブ色シルト粘土(5Y5/6)
- 4. オリーブ黄色砂質シルト(5Y6/4)(礫を少量含む)
- 5. オリーブ色礫混じり粘土(5Y6/6)
- 6. オリーブ色粘土混じり礫層(5Y6/6)
- 7. オリーブ色礫混じり粘土(5Y6/6)
- 8. 礫層
- 9. 礫層

第46図 溝SD601平面・断面図



第47図 溝SD602平面・断面図

溝SD601(第46図) 溝SD601は、幅 1.7~1.9m、深さ40cmを測り、主軸方向はほぼ座標北を向く。埋土は黄褐色、オリーブ色、オリーブ黄色の粘土・シルトから構成され、各層には礫が含まれている。礫の量は上層で少なく、下層で多い。埋土と遺構面構成層との見分けが付きがたく、断ち割り状に深掘りしたところ、遺構面下層の礫層(第9層)との境界が検出され、遺構の深さが確認できた。遺物は出土していない。埋土の堆積状況から、流水環境下で機能した溝と想定され、水路の可能性が高い。

溝SD602(第47図) 溝SD602は幅1.1~1.9m、深さ20cmで、主軸方向は北西~南東を向く。埋土は灰黄褐色の粘土で、遺構検出面の土質とよく似ている。溝状に検出されたが、埋土の堆積状況がSD601のような流水環境を示さないことから、積極的に溝あるいは水路と評価する根拠はやや薄い。

本トレンチの遺構面の標高は、溝SD601・602の地点で最も低くなるが、両遺構から東に向かって地形が隆起する。官山川との位置関係から自然堤防が存在するのかもしれない。この地形的特徴と対応するように、トレンチ東端付近ではピットが14基、散在的に分布する。ピットの配置に規則性はないが、明確に柱痕が確認できたピットが4基含まれる。ただし、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

第6トレンチでは、遺構からは遺物が出土 しなかったが、この地点の土地利用の時期を 示す資料として、遺構面の上層から出土した ごく少量の土師器片、陶器片が挙げられる。 小破片であるため正確な時期は特定できな

いが、中世から近世に比定できる。

2. 出土遺物

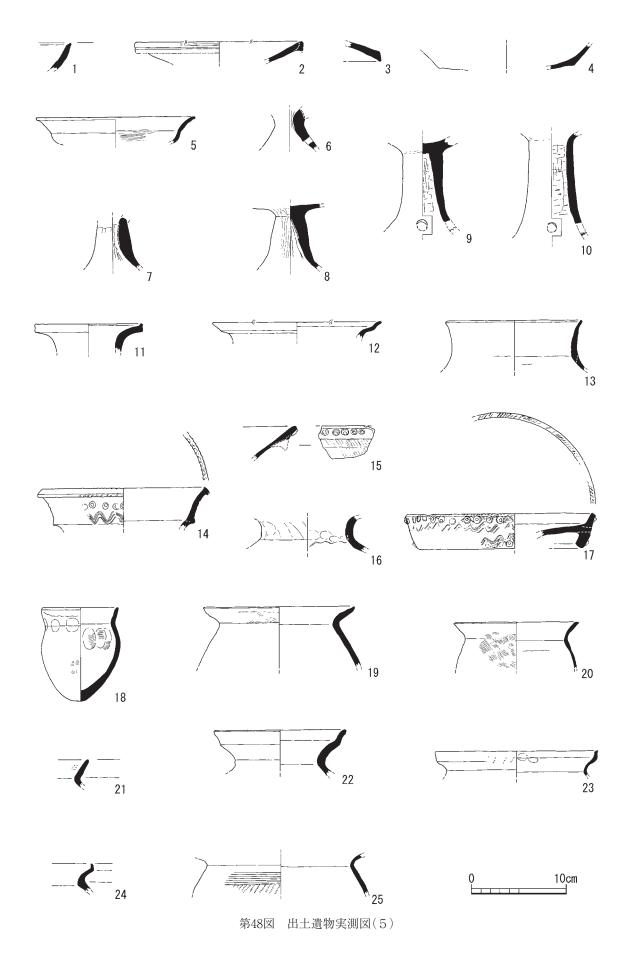
本調査で出土した遺物についてトレンチ順に記述する。調査範囲の制約上、トレンチ内で完結する遺構が少ないため、出土遺物は破片資料が大部分を占めた。また、ほとんどの遺物は、第2・4トレンチの遺構から出土している。以下、各トレンチ、遺構、包含層毎の出土遺物について記述する。

第1トレンチ(第48図1) 1は第1トレンチから唯一出土した遺物である。遺構面直上の堆積層から出土した。古式土師器の口縁部片で、鉢もしくは壺である。残存高3.8cmを測る。胎土が密で、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色を呈す。

第2トレンチ

溝SD210(第48図 $2 \sim 25$) $2 \sim 10$ は高杯および器台である。 2 は器台の口縁部である。 2元径17.4cm、残存高2.2cmである。胎土がやや粗く、1 ~ 1.5mmの茶色、灰色、黒色砂粒を含む。 焼成は良好で、色調は橙色を呈す。口縁部外面に擬凹線文を施す。凹線は2条のみ確認される。 3は高杯もしくは器台の脚部である。残存高2.1cmを測り、胎土は密で、1~3mmの褐色、赤茶 色の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。端部に横ナデ調整が施され、内外面にはナ デ調整が観察される。4は高杯の杯部である。最大径17.6cm、残存高2.8cmを測る。胎土は密で、 2mm以下の白色、灰褐色砂粒を含む。焼成はやや不足し、色調は灰白色を呈す。5は高杯の杯 部である。復元口径16.8cm、残存高2.8cmを測る。2mm以下の白色・灰褐色・半透明・褐色砂 粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈す。外面調整は摩滅のため不明であるが、内面 はハケ調整が観察される。6は小型の高杯の脚柱部である。残存高2.9cmを測る。胎土はやや密で、 3mm以下の灰褐色・白色・褐色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。脚部に円形の 透かし孔がある。7は高杯脚柱部である。残存高5.3cmを測る。胎土はやや粗く、1 mm以下の 茶色・灰色・白色・黒色砂粒を含む。外面にミガキ調整の痕跡が認められる。8は古式土師器の 高杯柱状部である。残存高6.9cmを測る。胎土はやや粗く、1 mm以下の茶色・灰色・白色・黒 色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調は淡橙色〜灰白色を呈す。杯部内面には赤色顔料が 付着する。本来、全面に彩色されていたのであろう。9は高杯杯部下部~脚柱部である。胴部最 小径4.2cm、残存高9.6cmを測る。胎土は密で、1~3 mmの白色·灰色·透明·褐色の砂粒を含む。 焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。内面にケズリ調整が施される。裾部に円形の透かし孔が ある。四方向に穿孔されたようである。10は高杯柱状部である。胴部最小径4.7cm、残存高 11.0cmを測る。胎土はやや粗く、2~3mmの白色・茶色・灰色砂粒を含む。焼成は良好で、色 調は浅黄橙色を呈す。内面にケズリ調整が認められ、裾部には円形の透かし孔がある。透かし孔 は四方向に穿孔されたようである。

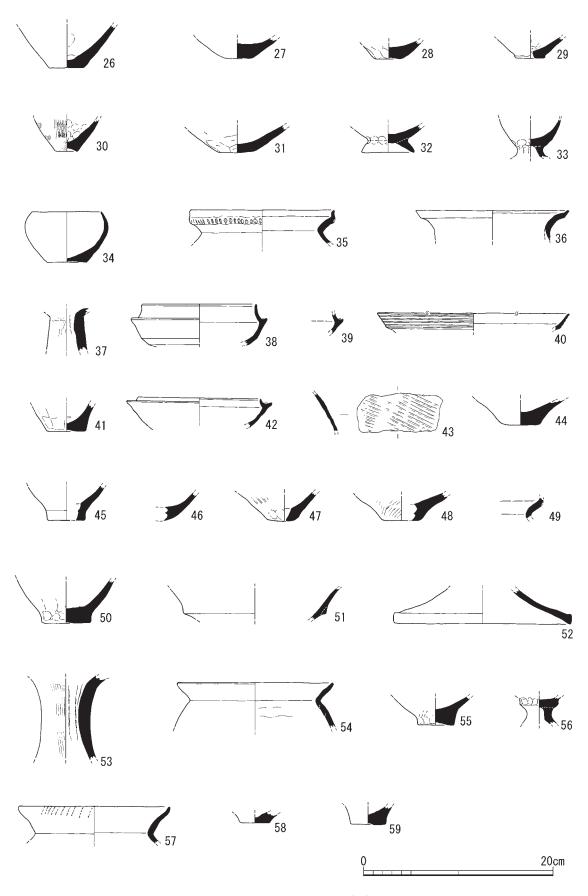
11~17は壺と考えられる資料である。11は広口壺の口縁部か。復元口径17.5cm、残存高3.0cmを測る。4mm以下の赤褐色砂粒、2mm以下の白色・灰褐色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。12は壺口縁部である。復元口径17.5cm、残存高1.9cmを測る。胎土はやや密で、0.5~1mmの灰白色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は外面が暗灰色、内面が橙色を呈す。内外



面が丁寧にナデ調整されている。13は直口壺の口縁部である。復元口径14.1cm、残存高5.1cmを 測る。胎土はやや密で、1~2mmの灰色・白色・茶色・半透明砂粒を含む。焼成は良好で、色 調はにぶい黄橙色を呈すが、外面が彩色されており、彩色部の色調は淡橙色を呈す。内外面は横 ナデ調整される。14は二重口縁壺の口縁部である。復元口径17.0cm、残存高4.3cmを測る。胎土 は密で、1 mm以下の黒色・褐色・灰色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。口唇部 の内外面にキザミ目、口縁部文様帯に竹管文、波状文が施される。15は二重口縁壺の口縁部であ る。残存高3.45cmを測る。胎土はやや粗く、 $1 \sim 2$ mmの白色・灰色砂粒および、 $1 \sim 1.5$ mmの 茶色・黒色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は基本的ににぶい橙色であるが、外面のみ着色され るようで、橙色を呈している。口縁下垂部は剝落している。口縁部外面上面には円形浮文が施さ れる。16は二重口縁壺の頸部である。屈曲部の復元径10.0cm、残存高3.7cmを測る。胎土はやや 密で、 $1\sim 2\,\text{mm}$ の半透明・白色砂粒、 $1\sim 1.5\,\text{mm}$ の青灰色砂粒、 $0.5\sim 1.5\,\text{mm}$ の茶色砂粒を含む。 焼成は良好で、色調は橙色を呈す。外面に強い横ナデが施されている。頸部の粘土で、体部の端 を包み込むように継ぎ足しているようである。17は二重口縁壺の口縁部である。復元口径 19.6cm、残存高3.7cmを測る。胎土はやや密で、1.5mm以下の黒色・灰色・白色・褐色の砂粒を 含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。口縁端部上面にキザミ目が施される。口縁部 文様帯では、櫛描波状文を施した後で、貼付け円形浮文の上に竹管文が施される。

18は小型の甕で、ほぼ完形である。口径7.9cm、器高9.95cmを測る。胎土はやや粗く、 $0.5\sim1$ mmの白色砂粒、 $1.5\sim2$ mm大の薄茶色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄橙色を呈す。内外面にハケ調整が観察される。

19~21は、「く」字口縁甕である。19は口縁部~胴部上半部で、復元口径16.0cm、残存高 6.3cmを測る。胎土が粗く、0.5~2mmの白色砂粒、2mmの赤色斑粒、2mmの青灰色砂粒を 含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。摩滅が著しいが、内面にナデ、屈曲部外面にハケ目が 残っている。20は口縁部~胴部上半部で、復元口径12.8cm、残存高4.95cmを測る。胎土はやや 密で、1~1.5mmの白色・灰色・黒色・茶色砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調はにぶい橙色を呈 す。外面にハケ調整が認められる。内面はナデ調整か。21は口縁部の破片である。口径不明、残 存高2.5cmを測る。胎土は密で、2mm前後の黒色・褐色・白色砂粒を含む。焼成は良好で、色 調はにぶい黄橙色を呈す。外面はナデ調整、内面は横ナデが施される。22は二重口縁壺の口縁部 である。ほぼ全周し、口径13.6cm、残存高4.4cmを測る。胎土は密で、 $1 \sim 3$ mmの黒色・白色・ 半透明・褐色の砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色〜橙色を呈す。外面に横ナデが認 められるが、内面調整は不明である。23は受口状の甕口縁部である。復元径17.2cm、残存高 2.55cmを測る。胎土はやや密で、1~2mmの茶色・白色・灰色砂粒を含む。焼成は堅緻で、色 調はにぶい黄橙色を呈す。口縁部外面に、櫛原体による刺突が施される。24は受口状の甕口縁部 である。口径不明、残存高2.8cmを測る。 1 mm前後の半透明・白色・青灰色および茶色砂粒を 含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈す。25は甕の口縁部下半部~胴部上部である。復元 頸部径15.6cm、残存高3.7cmを測る。胎土は粗く、1~2mmの白色・茶色・灰色砂粒を含む。



第49図 出土遺物実測図(6)

焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈す。胴部外面には、櫛描文が横方向に直線的に施され、その下に櫛原体によるキザミ目が施される。加飾の特徴から、受口状口縁甕と考えられる。

溝SD210(第49図26~33) 26~31は土器底部である。26は復元底径3.6cm、残存高4.6cmを測る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調はにぶい橙色を呈す。27は底径2.4cm、残存高2.1cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。28は底径2.8cm、残存高1.8cmを測る。胎土は密で、焼成は良好で、色調は褐灰色を呈す。29は底径3.15cm、残存高2.2cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。30は復元径2.45cm、残存高3.4cmを測る。胎土は名、焼成は軟質で、色調はにぶい黄橙色を呈す。31は底部最小径3.2cm、最大径3.9cm、残存高2.9cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。32・33は台付甕もしくは鉢の底部である。32は全周し、底径5.6cm、残存高3.0cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。33は底径不明、残存高4.0cmである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。33は底径不明、残存高4.0cmである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は外面が橙~にぶい黄橙色、内面が橙~にぶい橙色を呈す。

断ち割り4(第49図34) 34は無頸壺である。出土位置の関係からSD210に伴う遺物と考えられる。ほぼ完形で口径7.3cm、器高5.4cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。

不明遺構SX211(第49図35) 35は受口状口縁甕である。復元径15.2cm、残存高3.6cmを測る。 胎土は粗く、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。

溝SD203(第49図36~38) 36は壺口縁部か。復元口径16.2cm、残存高3.2cmを測る。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。37は高杯の脚柱部である。くびれ部径3.5cm、残存高4.6cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。38は須恵器杯身である。復元口径12.0cm、残存高4.4cmを測る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。39は須恵器杯身である。径不明、残存高2.7cmを測る。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈す。

溝SD204・206(第49図40~42) 40は北近畿系の甕口縁部か。復元口径20.2cm、残存高 1.8cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は外面暗灰色、内面は浅黄橙色を呈す。口縁部外面に擬凹線文を施す。41は甕底部である。底径4.1cm、残存高2.7cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。内外面にナデ調整が施される。42は須恵器杯身である。復元口径12.8cm、残存高3.1cmを測る。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。TK43~TK209型式期であろう。

溝SD207(第49図43~45) 43は弥生土器甕の体部である。残存高4.8cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。外面には左上がりのタタキが観察される。内面はハケ調整の後、丁寧にナデ消すようである。44は底部である。底径4.0cm、残存高2.7cmを測る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調はにぶい橙色を呈す。内外面にナデ調整が施される。

溝SD208(第49図45) 45は弥生土器底部である。底径3.5cm、残存高3.7cmを測る。胎土はや や粗く、焼成はやや軟質で、色調は外面が浅黄橙色、内面が暗い灰色を呈す。底部が穿孔されて いる。 不明遺構S X 209(第49図46) 46は弥生土器底部である。残存高3.1cmを測る。胎土はやや粗く、 1~2mmの灰白色砂粒を含む。焼成はやや軟質で、焼成は内面が浅黄色、外面がオリーブ黒色 を呈す。底部形態がレンズ状である。

第2トレンチ断ち割り3(第49図47) 47は弥生土器底部である。底径2.7cm、残存高2.9cmを 測る。胎土は密で、1.5mmの青灰色、・褐色砂粒を含む。焼成はやや良好で、色調は外面が浅黄 橙色、内面が橙色を呈す。内外面がナデ調整され、底部が穿孔されている。

第2トレンチ断ち割り4(第49図48~50) 48は弥生土器底部である。底径4.0cm、残存高2.6cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。外面にはハケ、内面にはナで調整が施される。49は甕の口縁部である。復元底径3.4cm、残存高2.45cmを測る。胎土はやや粗く、1~3mmの灰色、褐色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい橙色を呈す。屈曲部外面に横1列の刻み目が施される。50は弥生土器底部である。復元底径5.2cm、残存高4.5cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。内外面にナデ調整が施される。

第2トレンチ第2遺構面(第49図51~55) 51は高杯の杯部である。胎土は密で、焼成は不足し、色調は灰白色を呈す。摩耗のため調整は不明である。52は高杯の裾部か。復元底径18.6cm、残存高3.7cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は赤橙色を呈す。外面にミガキの痕跡が残る。53は高杯脚部である。残存高9.0cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は淡橙色を呈す。外面は粗い縦ハケの後にナデ調整を加えるようである。54は弥生土器の甕である。復元口径16.2cm、残存高4.75cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。口縁形態がく字形を描く。内外面にナデ調整されるようである。55は底部である。復元底径2.8cm、残存高3.8cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が浅黄橙色を呈す。

第2トレンチ第1遺構面(第49図56~60) 56は小型高杯の脚部か。残存高2.8cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が浅黄橙色を呈す。外面調整は、ハケの後にナデを加える。57は甕である。復元口径15.9cm、残存高2.9cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、外面は明黄褐色、内面は褐灰色~にぶい黄橙色を呈す。口縁部上部外面にキザミ目が施される。口縁端部が不明瞭に屈曲する。58は底部である。底径3.0cm、残存高1.0cmを測る。胎土は2mm以下の白色を含む。焼成は良好で、色調は外面が灰白色、内面が橙色を呈す。調整は不明瞭である。59は底部である。底径3.6cm、残存高1.9cmを測る。焼成はやや良好で、色調は灰白色を呈す。60は須恵器蓋である。復元径11.6cm、残存高1.2cmを測る。焼成は堅緻で、色調は灰白色を呈す。60は須恵器蓋である。復元径11.6cm、残存高1.2cmを測る。焼成は堅緻で、色調は灰白を呈す。

溝SD201(第50図61) 61は丹波型瓦器椀である。復元口径14.0cm、復元器高5.0cm、復元底径6.0cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈す。口径が大きく、丸みのある形態から、12世期後半に比定される。

第2トレンチ断ち割り2(第50図62) 62は白磁壺である。SD201に伴う可能性がある。復元 底径4.5cm、残存高3.0cmを測る。全面に施釉し、高台畳付部のみ露胎である。高台端部外面に 面取りのケズりが施される。11世紀後半~12世紀代に比定される。

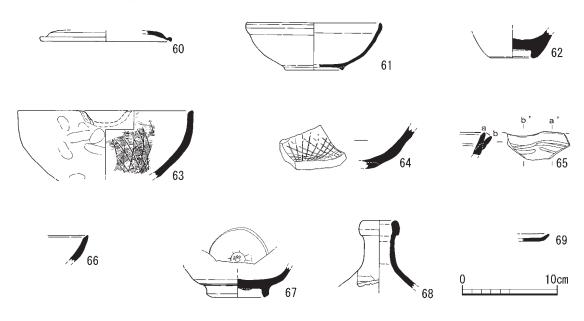
第4トレンチ

溝SD402(第50図63~65) 63~65は瓦質土器鉢である。63は体部で、復元口径18.4cm、残存高7.2cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は黒色で、外面調整はナデ、内面はハケ調整の後に斜格子状カキ目を施す。14世紀代か。64は体部の下部で、残存高2.25cmを測る。63と同一個体であろう。65は注口部の破片である。残存高2.9cmを測る。胎土は密で、焼成はやや軟質である。色調は暗灰色を呈す。内外面に横方向の凹線がほぼ平行に引かれる。15世紀代に比定される。

溝SD401~404(第50図66~68) 66はSD404出土の瓦質土器口縁部破片である。器種は鉢か。残存高3.6cmを測る。胎土が密で、焼成は良好である。色調は暗灰色を呈す。67はSD402出土の龍泉窯系青磁椀である。復元高台径5.5cm、残存高3.3cmを測る。釉調はオリーブ灰色、磁胎は灰白色を呈す。内面見返り中央部に印花文が施される。全面施釉で、高台内部が蛇の目釉はぎである。13世紀代に比定される。68は第4トレンチSD401出土の肥前産陶器瓶である。復元口径3.3cm、残存高7.15cmを測る。胎土にはパウダー状の白色砂粒を多量に含む。鉄釉が外面全体にやや雑に施され、白濁色の絵付がある。

第6トレンチ遺構面上層(第50図69) 69は土師器皿である。口径は不明で、器高0.8cmを測る。 口縁端部を内湾気味にわずかにつまみ上げて成形し、立ち上がり内面にやや強いナデがある。

弥生時代後期末~古墳時代初頭の遺物の特徴 遺物番号11・19・24・25・45・49は、赤褐色系の色調で、砂粒を多く含み、胎土が粗い。土器の器種は甕が多い。8・13・14・17・18・21・32は、色調が淡い黄褐色系で、胎土が密な傾向がある。外面が赤色顔料で塗色された土器が含まれる。器種を見ると、高杯や加飾壺が目立つ。3・15・16・56の色調は橙色系で、胎土が密である。器種は二重口縁壺の頸部、加飾壺、高杯である。



第50図 出土遺物実測図(7)

上記の掲載遺物の内、第48・49図掲載遺物は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての土器で、第48図1以外、全て第2トレンチから出土している。これらの土器の中には、胎土・色調などの特徴が似る資料がある。

第2トレンチ出土遺物は時期幅があり、出土遺構も異なるが、上に挙げた3群の土器は、色調・ 胎土の特徴と器種が対応している。特に淡い黄褐色系の一群と、橙色系の一群に、祭祀用に作ら れたとみられる土器が多く含まれる。 (古川 匠)

〔3〕総括

平成22年度の第17次調査で検出した主な遺構は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の溝群、奈良時代後期の掘立柱建物跡、平安時代~鎌倉時代と推定される掘立柱建物跡や柵列、土坑等のほか、中世から近世の素掘り溝群等である。また平成23年度の第19次調査では、古墳時代初頭の溝、古墳時代後期~飛鳥時代の溝、平安時代後期の可能性のある溝、平安時代末~室町時代にかけての溝群を検出した。これらの調査成果とともに、平成10年度からはじまった府営ほ場整備関連事業に伴う発掘調査において、特に大きな成果のあった遺構群の評価について、以下にまとめておきたい。

弥生時代~古墳時代の遺構 今回の調査では、弥生時代後期後葉~古墳時代初頭の多数の溝群を確認し、大きな成果を得ることができた。第17次調査区で検出した弥生時代後期後葉に掘削された最大幅5m以上の規模をもつ溝SD1は、北西から南東へ向けて掘削され、部分的に再掘削されながら、古墳時代初頭(庄内併行期古相)まで存続することが判明した。最下層が砂礫層であることから流路として機能したとみられ、灌漑を目的に掘削された溝と推定される。これまで第7次調査では、遺跡の北部から東部で弥生時代後期後葉の竪穴式住居跡を確認しており、居住域が第17次調査地の北東部を中心に展開するとみられることから、溝SD1は集落の南西の境界を画する溝であったと推定される。溝SD1の西部では、古墳時代初頭(庄内併行期古相)に溝SD2が掘削され、溝内から壺・甕・高杯など完形に近い土器がまとまって出土したことから、土器を伴う祭祀あるいは儀礼が行われ、一括して廃棄されたとみられる。集落の境界域における「僻邪」の意味をもつ祭祀、あるいは灌漑用水の導水に関わる農耕儀礼が行われた可能性がある。

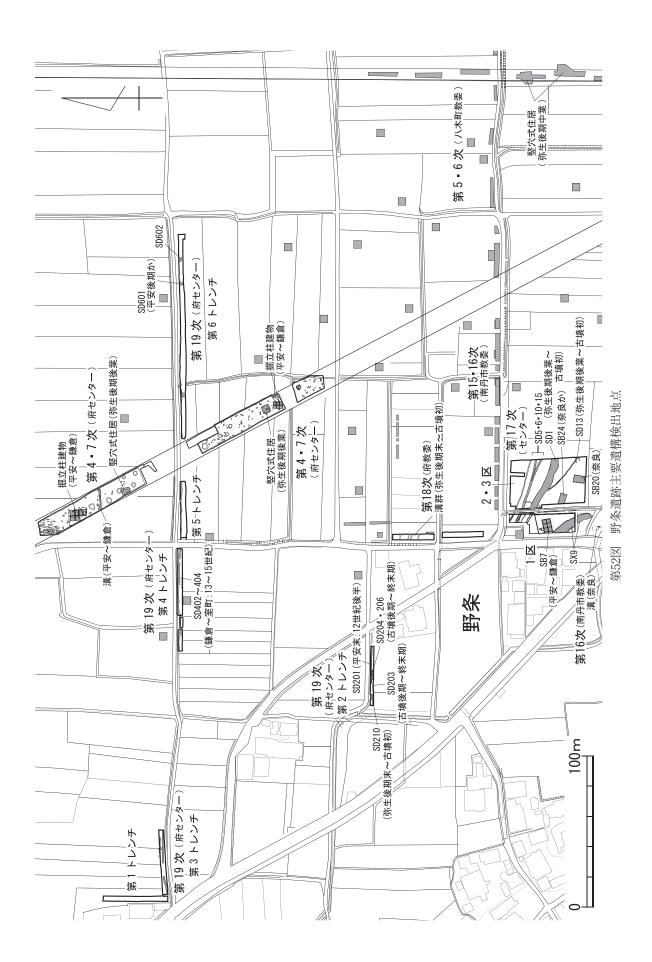
第19次調査の溝SD210は、第17次調査の溝SD1の延長方向にあり、当初、同一の溝の可能性があるとみられたが、出土土器は溝SD1よりもやや新しい庄内併行期新相に位置づけられることから、溝SD1から派生する溝の可能性がある。溝SD210の出土土器は、過去に調査された弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構群のなかでも最も新しい様相をもち、同時期の竪穴式住居跡は未確認ながら、集落の下限をおおよそこの時期に求めることができよう。今回の調査成果によって、弥生時代後期中葉に成立したとみられる野条遺跡(第5・6次調査)の集落は、弥生時代後期末から庄内併行期古相に最も集落規模を拡大し、庄内併行期新相の段階まで存続することが明らかとなった。

奈良時代の遺構 奈良時代の遺構としては、第17次調査で掘立柱建物跡を検出し、これまで確認されていなかった奈良時代の居住域の一角が明らかとなった。南丹市教育委員会による第15次調査では、近接する地点で奈良時代の溝が検出され、遺跡の南西部に同時期の遺構が広がるとみられる。奈良時代の遺構は、第10・12次調査で北西から南西へ斜行する溝が検出され、北に隣接する室橋遺跡南部における室橋遺跡第11次調査でも、同時期の溝群が確認され、奈良時代にすでに灌漑用水路の整備の端緒となる溝の開削が行われていたと考えられる。

平安~鎌倉時代の遺構と平安時代末期の開発 第17次調査では、ほぼ正方位の主軸をもつ平安時代~鎌倉時代と推定される掘立柱建物跡や柵列を検出した。第19次調査では、第2トレンチで平安時代末期(12世紀後半)の東西方向に掘削された溝SD201を検出し、第4トレンチでは鎌倉時代(13世紀)の東西方向の溝を確認した。過去19次にわたる調査のなかで、弥生時代の遺構群とともに、特に大きな成果がみられたのは、こうした各所で検出された灌漑に関わる水路とみられ



第51図 野条遺跡の弥生集落の推定範囲



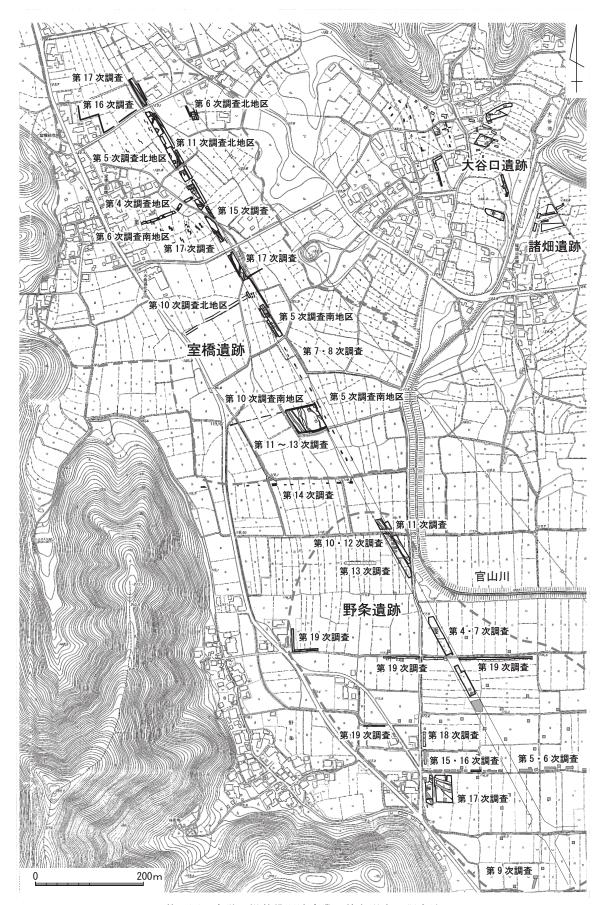
る遺構群の発見であり、平安時代〜鎌倉時代の耕地開発にかかわる遺構として注目される。

これまでの調査では、野条遺跡北部で平安時代中期~末期の遺構群を検出し(第10·12次調査)、正方位にのる規格性の高い平安時代末期の建物跡や溝を検出している。これらは、調査地周辺で現在みられる地割と主軸を同じくし、なかでも東西方向の溝SD1は、1町四方(約109m)の大畔半(第56図)を東西半町に二分する位置で検出した。周辺には現在も坪名に関連する字名がみられることから、一帯の方格地割が古代の条里型地割に由来し、12世紀にまで遡る可能性を指摘したところである。溝SD1の北部の正方位に配された掘立柱建物群の柱穴の一つから、秤量具である滑石製の分銅が出土するなど、野条遺跡北部の集落は一般集落と様相を異にし、穀倉等の倉庫群とこれに関わる在地領主あるいは地方官人等の屋敷地から構成された居住域とみられる。

地割の改変の時期を考証するうえで、重要な遺構は、野条遺跡第11・12次調査で検出した北西から南東へ斜行する溝SD4・SD201である。溝SD201からは、わずかながら11世紀後半の土器が出土している。その北西で検出された室橋遺跡第11次調査の溝SD11707(11世紀後半~12世紀前半)と土層断面や埋土の堆積状況が類似し、一連の溝とみると、溝SD201は12世紀前半まで存続する可能性がある。第19次調査では、この溝SD201の延長上で、溝SD601を検出した。埋土の状況が近似していることから、同一の溝である可能性がある。同様の溝は、野条遺跡の南端で調査された第9次調査でも確認され、後述する条里型地割に改変されたとみられる平安時代末期以前に、広範囲に用水路の整備が行われた可能性を示すものとして注目される。一方、野条遺跡第10・12次調査で検出した条里型地割に沿う溝SD1は、出土土器から12世紀中葉を下限とすることが明らかである。こうしたことから、地割の改変を伴う大規模な開発の時期は、12世紀中葉、具体的には第2四半期を前後する時期に行われた可能性が高いと言えるだろう。

今回報告した第19次調査の第2トレンチでは、12世紀後半に掘削された東西方向の溝SD201を、また第4トレンチでも13世紀代の東西溝SD402~404を検出し、はじめて野条遺跡西部で条里型地割に沿う遺構群が検出された。こうした調査成果によって、条里型地割が野条遺跡の西部にまで及んでいたことが明らかとなり、改めて12世紀における条里型地割への改変が周辺地域を一網する大規模なものであることを裏付ける資料となった。この地域は、12世紀後半に「吉富庄」に立荘される以前は、亀岡市池尻・八木町屋賀に所在した丹波国府の北部の外縁部に形成された国衙領と推定される地域であることから、条里制施行による平安末期における耕地や灌漑用水路の整備が、公領における知行国主や受領による新たな耕地開発を背景にしたものであるとみることができよう。

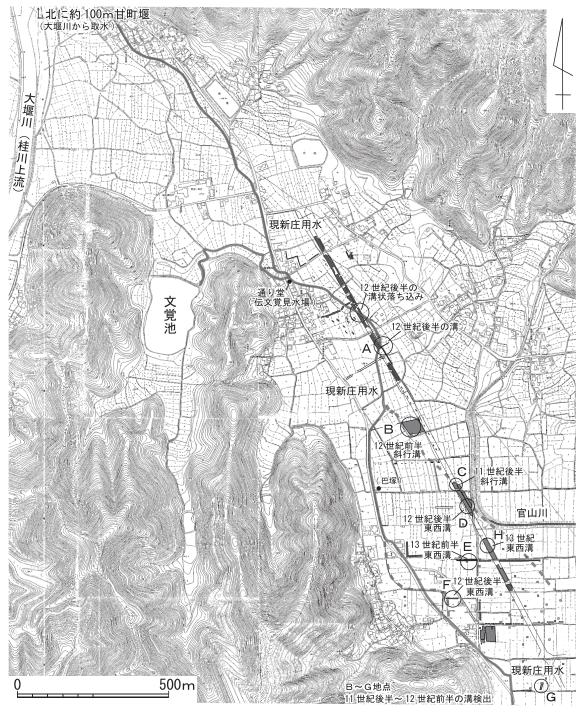
「新庄用水」と古代の用水路 今回の発掘調査の発端となったほ場整備の対象地域である八木町東部の平野部は、古代においては「刑部郷」とよばれ、荘園絵図として広く知られる「丹波国吉冨荘絵図写」に描かれた「吉富荘」の9郷の一つである。室橋遺跡や野条遺跡の立地する八木町東部は、平安時代の伝承が多く残されている地域である。表2にみるように、この一帯は12世紀後半には清和源氏の所領であったものが、平家の知行を経て、その縁戚であった藤原成親が丹波国知行国主となり、私領化したとされる。成親は、承安4(1174)年に私領宇都郷に周辺5郷を



第53図 府営ほ場整備関連事業に伴う過去の調査地

加え、後白河院法華堂に寄進し、この時に「丹波国吉冨庄絵図写」の原図が描かれたという。立 荘時に「刑部郷」は「吉富新荘」として加えられ、野条遺跡・室橋遺跡を含む八木町のほぼ全域 が新荘に含まれた。元暦元(1184)年には、僧文覚が神護寺の再興のため、後白河法皇に「吉富新 荘」の寄進を求め、「刑部郷」は神護寺領となるが、『船井郡誌』によれば、その開発を主導した 文覚が文治 4 (1188)年に新庄用水に繋がる灌漑用水を開削したとされる。

この地域における発掘調査で検出した平安時代後期から末期の灌漑用水路と推定される溝群の変遷については、過去の調査報告において詳細に述べたところである。本報告では最後に、これ



第54図 野条・室橋遺跡の水路群と大堰川・文覚池との位置関係

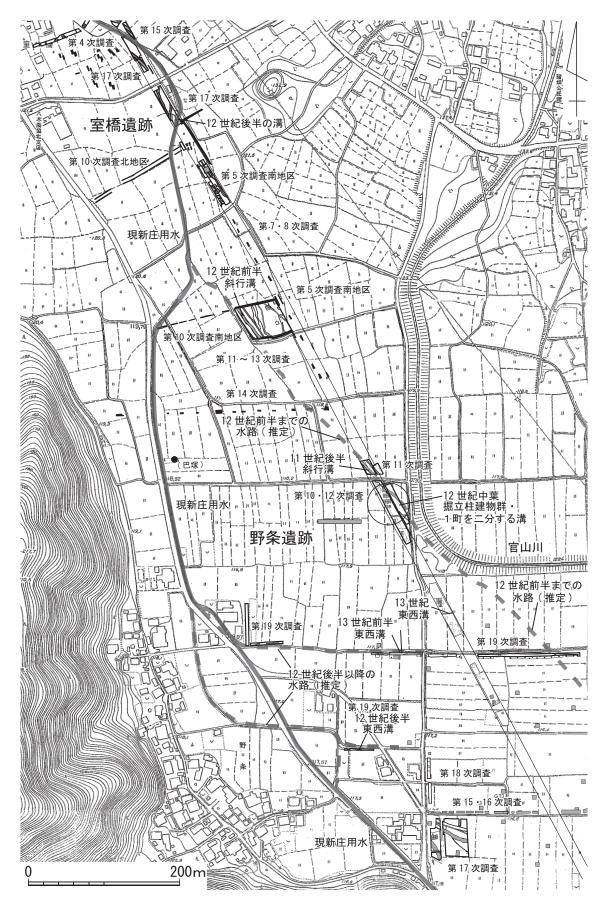
までのほ場整備に関わる発掘調査で得られた成果をもとに、現在の新庄用水の原形となった平安 時代末期における灌漑用水路の復元を試みておきたい。

大堰川(桂川上流)の本流が大きく西へ迂回する当地域は、古来、水利灌漑が重要な課題であった。現在の新庄用水は、大堰川井堰の一つであり、取水堰を園部町越畑地区に設置し、約2kmを導水し船枝地区に至るもので、約200haの受益地区をもつ南丹波最大規模の井堰である。考古学的にみても、早くも弥生時代には、大堰川から導水した可能性が高い灌漑用水路とみられる深さ2m以上の大規模な溝(室橋遺跡第17次調査)を確認している。奈良時代の溝群も各所で検出されていることから、水路の整備がこの時期からはじまったものと考えられる。平安時代には丹波国府の周縁に形成された国衙領として大規模な耕地開発の対象となり、それに伴う灌漑用水路の整備が課題となったとみられる。

今回のほ場整備に関連する調査で、新庄用水との関わりで、特に重要な成果があったのは、室橋遺跡第17次調査であり、現在、機能している新庄用水の直下で12世紀後半の溝SD17203(第56図B地点)を検出したことである。また室橋遺跡第5次調査でも、新庄用水と平行する12世紀中頃の落ち込みを確認していることから(A地点)、室橋地区では、平安時代末期の溝群が現在の用水路のラインとほぼ重複、あるいは近いものであることが判明した。現在の新庄用水は、大堰川堰から直接導水するが、渇水期には西の文覚池(第55図)からも引水されることから、文覚池の開

付表2 「刑部郷」と「吉富荘」をめぐる関連年表

西暦	元号	主な出来事	備考
931 ~ 38	承平年間	丹波国船井郡下の九郷の一つとして、「刑部郷」がみえる。	『倭名類聚抄』
1024 ~ 45	万寿~ 寛徳年間	僧皇慶、「池上房」(現在の大日寺池上院とされる)造営。 (丹波守は源章任、周辺は清和源氏の所領)	『谷阿闍梨伝』『四十帖決』
1159	平治元年	源義朝の私領「宇都郷」(京都市右京区京北)、平治の乱 の敗北により平家の所領となる。	(「刑部郷」周辺は国衙領とみる説 が有力)
1174	承安4年	丹波国知行国主藤原成親(平家の縁戚)、「宇都郷」に周 辺5郷(神吉・八代・熊田・志摩・刑部等)を加え、「吉 富荘」立荘。神吉・八代・熊田郷を「吉富本荘」に加え、 刑部・志摩郷を「吉富新荘」とする。「吉富荘」を後白 河法皇御願法華堂に寄進。	「僧文覚起請文」(平安遺文 4892) 文覚、1168 年以降、勧進等により 東寺・四天王寺・神護寺等復興は じめる。
		立券にあたり、「丹波国吉富荘絵図写」の原図作成(野条・ 室橋遺跡含む八木町のほぼ全域が新荘とされた)。	真継正次氏所蔵絵図(戦国〜江戸 初期の写しとされる)
1177	治承元年	藤原成親、鹿ヶ谷事件で配流。「吉富庄」は平家領へ。	
1178	治承2年	文覚、伊豆配流(1174年)から許され、神護寺へ戻る。 神護寺の本格的な再興に尽くす。	「僧文覚起請文」
1180 ~	治承4年~	源頼朝・木曽義仲挙兵。丹波国、一時、木曽義仲の知行。	巴御前の墓 (野条地区伝承)
		「吉富本荘」は源頼朝の所領に、「吉富新庄」(刑部郷含む) は後白河院が領有する。	
1184	寿永3年	文覚の求めで、源頼朝「吉富本荘」を神護寺に寄進。	「僧文覚起請文」
1184	元暦元年	後白河院が「吉富新荘」寄進し、一円神護寺領となる。	「僧文覚起請文」
1188	文治4年	神護寺文覚による新庄用水の開鑿(伝承)。	『船井郡誌』(如城寺所蔵「室橋縁由」 では治承元年(1177)5月とされる)
1199	正治元年	文覚、後鳥羽上皇に疎まれ、佐渡に配流。神護寺領は没収され、「吉富庄」は藤原範光の所領へ。	
1221	承久3年	承久の乱で藤原氏没官、鎌倉幕府の管領へ。	_
1225	嘉禄元年	鎌倉幕府、「吉富荘」を神護寺に寄進。再び一円神護寺 領となる。	



第55図 平安~鎌倉時代の検出遺構と現在の新庄用水

削もまた平安時代に遡る可能性あると言えよう。一方、野条地域を含む一帯で現在みられる条里型地割は、野条遺跡第10・12次調査地点を北限にしているが、この調査地の北部で条里型地割と斜交する溝を検出した。野条と室橋地区との境における室橋遺跡第11・13次調査では、11世紀後半~12世紀前半の溝SD11703(第56図C地点)を、また野条第10・12次調査で11世紀後半の溝SD203(D地点)を認している。これらの調査成果から、地割が改変される直前の時期には、北西から南東へ斜行する用水路が開削されたとみることができる。条里型地割に大規模に変更された12世紀後半以降の水路は、今回の第19次調査第4トレンチ(E地点)と第2トレンチ(F地点)で、東西方向の溝を検出したことから、現新庄用水に近い筏森山西麓に沿った南北のラインに付け替えられたものと推定される。このように、平安時代末期に行われた大規模な耕地と灌漑用水の整備に伴う開発が、現在この地でみられる景観の形成につながったものと言える。

室橋遺跡や野条遺跡の立地する八木町東部は、丹波でも平安時代の伝承が多く残されている地域として注目される。勧進聖として各地の開発に活躍した文覚の伝承もその一つであり、これまでの発掘調査の成果でも平安時代を中心に大規模な開発がなされたことが明らかになった。平安時代のこの地の領有権は、国家史とも連動するなかで大きく変遷しており、こうしたことが多くの伝承が残された背景となっているのであろう。平成7年度の第1次調査以来、19次にわたって実施された府営ほ場整備に関わる発掘調査の成果が、今後、地域史のさらなる解明と歴史学の発展に寄与し、多方で広く活用されることを願い、本報告を終えたい。

(高野陽子・古川 匠)

- 注 1 加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。測定の結果、 5770 ± 40 年BP (2σ の 暦年代でBC 4720~4520年)という、おおよそ縄文時代前期とされる分析値が得られた(測定ナンバー: Beta-314039)。分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
- 注2 高野陽子「野条遺跡第10・12次 室橋遺跡第5次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第128冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008
- 注3 前掲注2
- 注4 上島亨「池上院と神護寺・丹波国府 新史料の紹介と僧皇慶の活動をめぐって」(『郷土誌八木』 第10号) 2000
- 注5 高野陽子・辻本和美「室橋遺跡第15・17次」(『京都府遺跡調査報告集』第139冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

(参考文献)

辻健二郎『南丹市内遺跡発掘調査報告書 5 (野条遺跡第16次)』(南丹市教育委員会) 2011

福島孝行「府営農業農村整備事業関係遺跡平成22年度発掘調査報告(野条遺跡第18次)」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成22年度)』 京都府教育委員会) 2011

神村和輝ほか『神護寺領丹波国吉富荘故地調査報告書』(『八木町史編さん事業歴史資料調査報告書』 第2集 八木町教育委員会) 2009

上島享「丹波国府と吉富荘」(『京都と京街道―京都・丹波・丹後―』 吉川弘文館) 2002 平凡社地方資料センター編(『日本歴史地名大系26 京都府の地名』 平凡社) 1981